

欠

五帖御文講話

第三帖目

一名御文寸珍

御文講話

第三帖目

名繫門徒之章

抑當流ニテヒテ其名バカリヲカケントモガラモゴは、家は他宗門にてありながら、身分ばかり當流親鸞聖人の法義を聞人をさしたまへるなり、此人を田舎にては、御名繫御門徒衆と稱すと記事珠のいふところあたれり、示珠指は名字の門徒といふ、比丘にも名字の比丘あるが如く、大行寺の法縁にも、京都講内にては、越後屋喜兵衛に吉富は禪宗にて御牧肇篤もしかなり、井筒屋七兵衛は浄土宗にて、八百忠山鹿等もしかなり、大阪尼講にては、大和屋おこのは眞言にて、綿屋おしもは天台也、其外京阪のあいだにて日蓮黨の輩に、田

御 文 講 話

半近彌もあり、けれども正定講有縁講聞信講高庵講等につらなりて
 淨土眞宗の安心に住し、念佛往生の行人あまたあるが如く、蓮師の
 御在世には、勿論他宗の多ければ、かゝる名字の御門徒の數百千あ
 りたるならん、家は禪でも法華でも、拜は題目大日でも、内心彌陀
 に歸命して、一念往生治定のうへ、多念稱名の同行ならば、これを
 知れるを眞宗のしるしとし、それらの初心をすゝむるごて、當流に
 おいてその名ばかりをかけたたらん輩もこのたまひたるなるべし。又
 モトヨリ門徒タラン人モこは、祖師聖人御在世に勸化を受けし、老
 若の御終焉にあつまりて、戀慕涕泣せし時代より、平太郎の跡も一
 寺となり、明法房の末も子孫ありて、頗ぶる在世にこへたるも、一
 念業成を知らざれば、これを知らざるを他門とすご誠しめたまへる

御 文 講 話

のたぐひをさして、もごより門徒たらん人もこのたまひての御教化
 ごみへたり。安心ノトホリヲヨクコ、ロエスハアヒカマヘテ今日ヨ
 リシテ他力ノ大信心ノチモムキチンゴロニ人ニアヒタヅチテ報土
 往生ヲ決定セシムベキナリと示たまへるより、アナカシコくにい
 たるまで、御文言のまゝをいくたびもくも讀むべし、これが寸珍
 の指南とするところなり、末註はいづれもくはしく釋すれども、今
 は釋せぬも冥慮に應ぜん、そのゆへは光明名號の示しかた、攝取
 光明の御分別はかく示したまへるのほかには、筆にかくべきもな
 く、口にいふべきもなければ、このうへのきかしめやうはなし、阿
 彌陀如來とはならせたまへるを、すなはち阿彌陀佛とは申すなりと
 あるも、光明に照されて罪障きゆる、罪障きゆるがゆへに光明のう

三帖目 三百八十八
ちにおさめごらるゝ、その攝取の光明にあふ時尅に信心さだまるこ
の、光明を名號の行體にむすびごめて、我等が往生すべきこそはり
をあらはすご示したまふ、金剛堅固の信心のさだまるごきをまちえ
てぞ、彌陀の心光攝護するごあれば、信決はさきなり攝取はあごな
りご、和讃の祖判往生の心に疑ひなくなり候は、攝取せられまひら
せたるゆへごみえて候ごは、末燈の祖釋にて攝取はさきなり、信決
はあごなり、又のたまはく、信心のさだまるご申すは、攝取にあづ
かるごきにてさふらふごも、又眞實の信心をたまはりてよろこぶこ
ゝろのさだまるごき、攝取して捨てられまひらせざるゆへに、金剛
心になるごきを正定聚の位に住すごもありて、みなくこの一章の
御示しにあはせて、拜すべき事なり、超世悲願の事ごもは、上の章

にていくたびも出たる事なりふりかへりてみるべし。

第二通

諸宗區之章

夫諸宗ノコ、ロマチノニシテイツレモ釋迦一代ノ説教ナレハマコ
トニコレ殊勝ノ法ナリ如説ニコレヲ修行センヒトハ成佛得道スベキ
コトサラニウタカヒナシごは、今日日本にわたりてある宗旨は、法相
宗三論宗等の八家九宗にて、大和國にては法隆寺興福寺東大寺西大
寺等の七大寺にみなその宗意を傳燈せらるれごも、あまねく日本國
中にいりみちてあるごころは、天台眞言禪宗の三家なり、これも八
家ごいふごきは俱舍宗成實律宗までなりしが、祖師親鸞の御消息に
も佛心宗ごいふは、このよにひろまる禪宗これなりごありて、禪宗
はあごよりわたりてひろまりたるものなり、これを八宗に加へて九

宗といふなり、それに又淨土宗興行によりて、聖道門廢退す、これ空師の所爲なりとて、ねたみそねみたる淨土宗を加へて、都合十宗となりたるものなり、今はその聖道の諸宗をさしてこゝろまちく、このたまへるなり。釋迦一代の説教といふては、八相成道の佛説にて、下の神明六ヶ條の中に、和光同塵ハ結縁ノハジメ八相成道ハ利物ノチハリこのたまへるこれなり、佛は佛陀も勃陀も稱して、一切智一切種智を得て、事理の無明を斷盡したまひたるにて、一切智は迷理の無明を斷じて、眞如の理に達し、一切種智は迷事の無明を斷じて、世尊となり、眞如是萬法にして、萬法是眞如なるを知たるを一切智とし、海の深さを知、山の高さを知、天の星の數を知、地の砂の數を知を一切種智として、悉く事と理との無明を斷じ盡し

たる佛世尊なるが釋迦の御身柄なりと知るべし、其釋迦の御口には口音陳唱とて、始め華嚴經より終の涅槃經まで、説演たまひたるを釋迦一代の説教このたまへるなり、其説法のことを轉法輪といふなり、これが八相成道の肝要也、八相といふは、釋迦も今の彌勒の如く、はじめは天にましましたるを上天といひ、次にあまくだりて御母の胎にやどりたまへるを下天といひ、それより宅胎出胎出家成道轉法輪入涅槃とぞへて八相といふなり。大經上卷のはじめに、兜率天に處して正法を弘宣し、彼天宮を捨て神を母胎に降、右の脇より生て七歩を行くを現す、光明顯耀にして普く十方無量の佛土を照すに、六種に震動す聲を擧て、自稱す、吾當世に於て無上尊なるべしと、釋梵奉侍し天人歸仰す、算計文藝射御を示現し、道術を

博綜し群籍を貫練す、後園に遊て武を講じ、藝を試む、現に宮中色
味の間に處して、老病死を見て世の非常を悟り、國に財位を棄て
山に入て道を學す、服乘白馬寶冠瓔珞これを遣て還しむ、珍妙衣を
捨て法服を着し鬚髮を剃除し、樹下に端坐して勤苦すること六年な
り、行所應の如く五濁の刹に現じて、群生に隨順し、塵垢あること
を示して、金流に沐浴す、天樹の枝を按て攀て池を出ここを得せし
む、靈禽翼從して道場に往詣す、吉祥感徴して功祚を表章す、哀て
施艸を受て佛樹の下に敷跏趺して坐し、大光明を奮て魔をしてこれ
を知しむ、魔官屬を率て來て逼試む、制するに智力を以てし皆降伏
せしむ、微妙の法を得て最正覺を成ず、釋梵祈勸して轉法輪を請す
佛の遊歩を以し佛吼をもつて吼す、法鼓を扣き法羸を吹、法劍を執

法幢を建、法雷を震法電を曜し、法雨を澍し法施を演、常に法音を
以て諸の世間を覺せしむ、光明普く無量の佛土を照に、一切世界六
種震動す、總て魔界を攝し魔の宮殿を動せしむ、衆魔懼怖して歸伏
せざるはなし、邪網を擱裂し諸見を消滅して、諸の塵勞を散じ諸の
欲塹を壞、法城を嚴護して法門を開闡し、垢汗を洗濯して清白を顯
明す、佛法を光融して正化を宣流し、國に入て分衛して諸の豐膳を
獲、功德を貯て福田を示し、法を宣欲て欣笑を現す、諸の法藥を
以て三苦を救療す、道意無量の功德を顯現し、菩薩に記を授て等正
覺を成ぜしめ、滅度を示現して拯濟するここ極なし」ごあるまでが
釋迦の八相を説たまひたる大經の文なり、此釋迦の成道を手本とし
て、大經の時に一時來會ごあつまりたる普賢文殊も、賢劫の彌勒も

三 帖 目
三百九十四
十六正士も、無量の行願を具して、十方無量の世界に於て各八相成道して、本師阿彌陀の本願海を説たまへるごあらはしたまへる大經にて、微塵々々の世界にて出現説法の無量諸佛は、みな大經を出世の本懐として説たまへることなるがゆへに、この八相成道は法華經にもなし、大般若にもなし、八宗九宗に讀誦する經文にはなく、淨土門にて日々に讀誦する彌陀の四十八願を説たる大經にて、來會の菩薩の嘆徳に顯現なるは、如來所以興出世唯説彌陀本願海のことはりにて、如來出世の本意として本願眞實をひらきたまひたるにて、大經は眞宗の根本經なるものなり、然れども其經のみにては、宿因宿縁のなき衆生は、佛世の悲化にもるゝがゆへに、八萬四千の機に對して、八萬四千の法をさきたまひたる大小權實顯密教禪の諸宗なれ

ば、マコトニコレ殊勝ノ法ナリと示したまひたるものなり。如説ニコレヲ修行センヒトハ成佛得道スベキコトウタガヒナシこのたまへるは、まことに有難き事にて、すでに大經にて見れば、世自在王佛の教にしたがひて如説に修行して、今現にましますを彌陀成佛といふなれば、得道にうたがひはなき事なり、然れども、その外には成佛ありしもきかざれば、佛果をうるはまれなる事と見へたり、聖道權化の大師たる弘法傳教の高徳も、兜率にいたりて、彌勒の化益にあづかりて、佛果をまちたまふなるべし、みな如説の修行者たる有難き聖者にてまします事なり。末代コノコロノ衆生ハ機根最劣ニシテ如説ニ修行セン人マレナル時節ナリごは、佛説には起行修道未有一人得者ごある、末法のいまの時を示したまへるなり。コ、ニ彌陀

三帖目 三百九十六
 如來ノ他力本願トイフハ今ノ世ニテヒテカ、ル時ノ衆生ナム子トダ
 スケスクハンガタメニ五劫ガアヒタコレヲ思惟シ永劫ガアヒダコレ
 ナ修行シテごあるより一期ノイノチツキヌレバカノ極樂淨土ヘチク
 リタマヘルコ、ロチヌナハチ阿彌陀佛トハマウシテタテマツルナリ
 ごあるまでは、聖道自力にひきかへて、淨土他力のことはりを示し
 たまへる也、かるがゆへに△他力本願トイフハ△他力本願ナバ△他
 力ノ信心トイフ△他力ノ信心トイフハ△他力信心ノスガタナリご他
 力のことはを重々につらねたまへるにて知るべし、信心諍論の傳文
 にて、他力の信心は善惡の凡夫ごもに佛のかたよりたまはるごある
 南無阿彌陀佛の廻向の恩德廣大不思議門の廻向利益他の眞實信心な
 るがゆへに、聖道萬行はさしおきても唯有淨土の通入ある事を明し

て、釋迦一代の遺法はかくれても、彌陀悲願の念佛往生はさかりに
 て、成佛得道するごをのべたまひたるものなり。淨土ヘチクリタ
 マヘルごあるをヒカリノウチニオサメチカル、ゆへにムカヒタマヘ
 ルニハあらずごして、攝取ご來迎ごの差別を知らせたまへるご示珠
 指のいふごころわけて有難き事なり。サレハ世間ニ沙汰スルトコロ
 ノ念佛トイフハタ、クチニダニモ南無阿彌陀佛トナフレバタスカ
 ルヤウニミチナオモヘリソレハオボツカナキコトナリごは、下の章
 にも同文あり、又五帖目にも、それ人間に流布して、みな人のこゝ
 ろえたるごをりは、なにの分別もなく、くちにたゞ稱名ばかりをこ
 なへたらば、極樂に往生すべきやうにおもへり、それはおほきに覺
 束なき次第なりごあるに同じく、みな他流の談ずるごころ當流へま

ぎれ入りしをゑらびたまへる中興蓮師の常談なり、オボツカナシの詞は、萬葉にも源氏にもおほくありて、心におぼへつかねたるおちつきなきをいふとて、遠近のたつきも知らぬ山中におぼつかなくもよぶこころかなといふ歌を引てかきたる記事珠の指南の深切なるは行届きたる事なり、すなはち章主の亡母十三回忌とて、よみたまひしにもおぼつかかな、まことのこゝろもよもあらじとある事、帖外の章にあるをも今のおぼつかなきに同じ、御こゝろさきこへける也。この義門を解するには、聖覺法印の唯信鈔に、たゞ名號を唱ること、誰か一念十念の功をそなへざる、然れども往生する者はきはめてまれなり、これすなはち三心を具せざるに依てなり」とあるを引つけて見せたる叢林集は、目近く耳近くぞありける、まことに法印

大和尚位聖覺は、信行兩座の對談にも、信不退の先進にて、選述の題號も唯信鈔としまへり、高祖これに文意をかきたまひしも、信心爲本の御同意なるがゆへなれば、その文意に、信とはうたがふこゝろなきなり、これすなはち眞實の信心なりと示したまへるを有難く頂戴すべし。サリナガラ淨土一家ニサヒテサヤウニ沙汰スルカタモアリ是非スベカラズとは、自餘の淨土宗の中にも、わけて鎮西の所流をさしたまへるご見ゆれども、是非スベカラズとあれば、自流を是とし他流を非として、判断せば、世俗のいふが如く、沙汰は無用と沙汰をしにくるになるべし、西鎮今の三家對辯は、眞宗學問の要論なり、けれども是非すべからずの文におゐては、是非を沙汰せず他章にいたりていふべし。コレハ我一宗開山ノス、メタマヘル

三 帖 目 四百
 トコロノ一流ノ安心ノトホリヲマウスバカリナリとは、御本書の信
 の卷涅槃眞因唯爲信心の御一言を根本として、その信心は他力なり
 廻向なりと、如來利益他の眞實を明して、信心正因を示したまへる
 こと、今家別途の所談なるむねをのたまへるなり。カクノゴトクコ
 、ロエタランヒト名號ヲトナヘテ彌陀如來ノワレヲヤスクタスケ
 タマヘル御恩ヲ雨山ニカウフリタルソノ佛恩報盡ノタメニハ稱名念
 佛スベキモノナリとは、上におゐて世間に沙汰する念佛は、口にこ
 なふるのみとありて、他流を簡たまへるゆへに、それをあやまらざ
 るやうに、今家にては寝ても覺てもへだてなく、南無阿彌陀佛はこ
 なふるものなれども、信の上の稱名はいのちのあらんかぎり、太郎
 入道覺信の臨終の如くよろこびすでにちかつけりとは、いさみこなへ

て往生する事をうちかへして示したまへるものなり。

第三通

性光門徒之章

此方河尻性光門徒ノ面々ニテ佛法ノ信心ノコ、ロエハイカヤウ
 ナルランマユトニモテコ、ロモトナシとは、この河尻の門徒は、信
 心の心得かたあるひは鎮西にまぎれて、口稱を募り、西山にまぎれ
 て生佛不二を張ものありしならん、その門徒等の心中を心元なしと
 のたまひて、今家の正意にならしめたまへるの御教化と見へたり、
 僧分にては西鎮兩家の安心をよくくわきまへざれば、今の世にも
 知らずくして、他流にまぎるゝこともあるべく、すでに安心決定
 鈔を全く宗意とするもあり、又取捨して分別するもありて、三業だ
 のみを對破せし歸命本願訣に評するところ、まさしく西山の鈔物の

今家へまぎれ入たるむね、文證理證ともにつくしたりごもいふべきを、決定鈔を取捨する事をせず、全く金玉として談ずる方にては、安心決定鈔を西山の門流に秘藏するは、今家聖教の西山門へまぎれ入たるものなりとて、他流の物とする事をゆるさず、それを又われら傍觀してあちらのこちらへまぎるゝも、こちらのあちらへまぎるゝも、たがひに似たる事であればこそなれと、そのまぎるゝをおそれての宗學なる事を、今も懈怠を引たて、河尻の尻にちなみて、懈怠の尻に鞭をあてたるのみ。當流一義ノコ、ロチクハシク沙汰スベシとあるより十人アラバ十人ナガラミナホトケニナルベシと十郎十生の心を示したまへるまでは、御文面のまゝをよみていたゝくべし。タ、コエニイダシテ念佛バカリナトナフルヒトハオホヤウナリ

ソレハ極樂ニハ往生セズコノ念佛ノイハレヲヨクシリタル人コソ佛ケニハナルベケレトは、粟散片州に誕生して、念佛宗をひろめしは法然上人なり、その上人は勢至の化身にて、無碍光佛たる阿彌陀より、智慧の念佛を直受したまひけるが、楞嚴經に説たまへる、超日月光この身には念佛三昧おしへむの念佛圓通なり、一子のごとく憐念ご子の母おもふ憶念ご、染香人の香氣のごとくなりたるが念佛の心をもちて、無生忍に在るの領解なれば、今家の相承このほかにあるべきなし、然ればこれたゞごなへてはたすからざるなり、この念佛のいはれをよく知りたる人こそ、ほごけにはなるべけれの念佛成佛のこれ眞宗也と知るべし、然れば、今家の行者、鎮西にまぎるゝ事なかれ、又五念門の禮拜も、五正行の讚嘆も、起行の上の事な

御 文 講 話

れば、生佛不二の西山にまぎれてわづらはしき秘事といひて、ほご
 けをもをがまざるものにまざるべからず。アラアリガタノ彌陀如来
 ノ誓願ヤ釋迦如来ノ金言ヤこは、彌陀因願の欲生我國若不生者、釋
 迦成就の願生彼國即得往生二河譬にありての、汝一心正念のこひよ
 くの招喚も、其道をたづねてゆけの發遣も、一枚起請へうつして
 もうたがひなく、往生するぞこおもひこりて唯一向に念佛すべし
 二尊のあはれみいづれか但行口稱にも、生佛不二にもまざるべきな
 し、これすなはち二尊の教に信順して、あらありがたの誓願やあら
 ありがたの金言やこ、あふぎ信するのよろこびなり。サテコノウヘ
 ニハ一期ノアヒダマウス念佛ノコ、ロハ彌陀如来ノワレヲチヤスク
 タスケタマヘルトコロノ兩山ノ御恩ヲ報ジタテマツランガタメノ念

御 文 講 話

佛ナリトオモフベキモノナリこは、上みには二尊の恩徳をあげなが
 ら、その釋尊の發遣は、彌陀招喚のひびきにて、淨土の聲の娑婆の
 ことばにきこゆるを攝末歸本して、彌陀一佛の報恩にむすびたまひ
 たるなり。

第四通

生死盛衰之章

夫●人●間●ノ●ア●ダ●ナル●體●ヲ●案●ズ●ル●ニ●生●アル●モノ●ハ●カ●ナ●ラ●ス●死●ニ●歸●シ●サ
 カ●ン●ナル●モ●ノ●ハ●ツ●井●オ●ト●ロ●フ●ル●ナ●ラ●ヒ●ナ●リ●こ●は●、●つ●ら●く●こ●世●間●の
 ありさまを見わたす事にて、つらなりてつらりこ見ゆるすがた、又
 つくくこ思熟するおもむきをいふにて、文字にあて、いふときは
 情思こも熟思こも、又は列々こも眞名假名のならひはあるべし、今
 は人間の化なる體を案ずるにこあれば、思案すればの義なれば、つ

三帖目 四百六
くくごおもひ見るにこ、遷流無常をのへんごして發語をなしたま
ひたるものなり、生ある者は死に歸する、盛なる者は衰るの言句は
佛説にて涅槃經によりたまへるなり、其外の經釋にも生死盛衰の説
は、みな同じ事にて、眼前につらりと見わたすところ世々の發心集
に、いづれもいふが如く發心のはじめ壞滅の無常を觀するを先ごす
るごこ、大經の悟世非常入山學道の如し。ナラヒナリごは、世のな
らひあるならひなごいふ言葉にて、字は俗の字なり、世俗風俗なご
いふ文字にて、世間にいふごこを俗にいふごきはかくいふなりご、
眞俗雅俗ご對するごきの、俗の字白拍子のうたふゆかりの月ごいふ
今様の文句に、關よりつらいよのならひごいふも、文字にてはよの
ならひは世俗ごかくべきなり。サレバタイタヅラニアカシイタヅ

ラニクシテ年月ヲオクルバカリナリコレマコトニナゲキテモナサ
カナシムベシごは、下の四帖目にも、タイタヅラニアカシクラ
シテ老ノシラガトナリハテヌル身ノアリサマコソカナシケレごある
同文ありて、受けがたき人身を受け、遇ひがたき佛法にあひながら
△古今集の詠歌に、うけがたき人のすがたにうかび出て、こりずや
誰も又しづむべきごいへるにひごしきは、なげくべくかなしむべき
ごごなり。コノユヘニ上ハ大聖世尊ヨリ下ハ惡逆ノ提婆ニイタルマ
デノガレガタキハ無常ナリごは、世尊の入滅には、草木一時にかれ
しほみ、須彌山王も動揺す、無常は水月芭蕉の如しご、諸天世人も
啼泣す、提婆の死ぬる其時は、指の爪に毒を著、佛を禮して害せん
ごするに、大地さけて生ながら地獄に入、これ善悪はかはれごも、

ともに無常のありさまなり、これを今の示しなりと知るべし、釋迦
 の事は大論の二卷目、提婆の事は大論の十四卷目に出たり。シカレ
 バマレニモウケガタキハ人身アヒガタキハ佛法ナリとは、涅槃經の
 二十三卷目に、人身をたきこと、優曇華の如く佛法あひがたきこ
 と優曇華に過たりとあるによりたまひたるものなり。タマク佛法
 ニアフトコトエタリトイフトモ自力修行ノ門ハ末代ナレバイマノト
 キハ出離生死ノミナハカナヒガタキアヒダとは、これも涅槃經に清
 淨の法寶見聞することを得ること難くして、今已に聞盲龜の浮木の
 孔に値が如しと、説たまへるところ、すなはちタマク佛法にあふ
 ことをゑたりとの義なり。自力修行ノ門ハ末代ナレバイマノトキハ出
 離生死ノミナハカナヒガタキアヒダとは、大原問答のとき、法然上

人の御ことばに、予遁世のそのかみなり衰老の中比にいたるまで、
 ひそかに一代の經文をひらきて、つらく出離の要義を案ずるに、
 顯につけ密につけ、開悟たやすからず、事といひ理といひ、修行成
 就しがたしこのたまひ、その後の仰せに大原にての問答は、法門に
 ては互ひに牛角論なりしが、自力聖道の法門にて、今の根機にかな
 へるやといひけるとき、みな問題のともがら閉口なりしゆへ、機根
 くらへには法然勝たりとおほせありしに、同じく聖覺法印の唯信鈔
 に聖道門といふは、この娑婆世界にありて、行をたて、功をつみて
 今生に證をもらんとはげむなり、教の大意はしかるべけれども、末
 法にいたり濁世におよびぬれば、現身に證を得こと億々の人の中に
 一人もある事かたし、これによりて今の世にこの門をつとむる人は

御 文 講 話

即身の證におゐては、みづから退屈の心をおこして、或ははるかに
 慈尊の下生を期して、五十六億七千萬歳の曉の空をのぞみ、或はこ
 をく後佛の出世をまちて、多生曠劫流轉生死の夜の雲に惑へり、或
 はわづかに靈山補陀落の靈地を願ひ、或は再び天上人間の小報をの
 ぞむ、結縁まことに尊むべけれども、速證すでにむなしきに似たり
 願ふところ尙是三界の内、望むところ又輪廻の報なりと示したまへ
 るにひこし。彌陀如來ノ本願ニアヒタテマツラズハイタヅラゴトナ
 リ。こは、和讃にては、如來の悲願を信ぜずば、出離その期はなかる
 べし。往相還相の廻向にまうあはぬ身となりせば、流轉輪廻のき
 はもなし。如來の廻向なかりせば、淨土の菩提はいかゞせんこある
 におなじ。シカルニイマスデニワレラ弘願ノ一法ニアフコトチエタ

御 文 講 話

り。こは、木願力にあひぬれば○住正定聚の身となれる○弘願眞宗に
 あひぬれば○大悲心こそ轉ずなるこある御示しのるいにて身の仕合
 をよろこばしめたまへるなり。ユノユヘニタヅチガフベキハ極樂淨
 土タノムベキハ彌陀如來こは、自力修善のかなはざる末代には
 生れても、やすく往生成佛する弘願の大法にあひぬるをよろこ
 び、淨土を願ひ彌陀をたのめこおしへたまへるなり、一法の法談を
 もする輩は、これらの御こごばは、よくよくこゝろえておくものな
 り、たのむ信心にねがふ願心をすゝめたる三業歸命の輩の如きは、
 これらの御こごばをわきまへざるゆへなり、願生彼國と明信佛智と
 の辨別にて、淨土は願ふものなり、彌陀は信ものなり、たのむは佛
 につき、ねがふは土につくこ知るべし、願生欲生は彼國にいたらん

願ふことにて、安樂淨土をねがひつゝ、他力の信を得ぬひとは、安樂國をねがふひと正定聚にこそ住すなれどもありて、信者も不信者も願ふ極樂なるがゆへに、往生の正因には、度我救我の願心はならぬものなり、然れば、欲生正因をつのりたる時代の法談は、學者にても役僧にても、正も有不正もありて、混雜したるならん、然れ共願樂欲求の心、願作佛心願往生心等の願の義は、願生歸命の願心の事にはあらず、諸佛の淨土を願ふには持戒をもつて願ふもあり、誦經をもつて願ふもあり、然るに、彌陀の淨土へは、信心の正因たる淨土なるがゆへに、信心にて願生淨土の願ひのかなふをもつて、信心のこころを願作佛心とも、願往生心ともいふ事なりと知るべし、かへすがへすも信と願とは、よくよく辨別して、聖人一流の御勸化

のおもむきは信心をもつて本させられて、願心をもつては本させられずと自信教人すべし。コレニヨリテ信心決定シテ念佛マウスベキナリとは、上に弘願の一法にあふことを得たりとある、第十八願の三信十念の次第これなり。シカレバ世ノ中ニヒトノアマチクコ、ロエオキタルトホリハタ、コエニイダシテ南無阿彌陀佛トバカリトナフレバ極樂ニ往生スベキヤウニオモヒハンベリソレハオホキニオボツカナキコトナリとは、上にもある簡捨したまへる他流の所談にて信をいふにも行具の三心にて、黒谷の和語をうつしていふなれどもおぼつかなき事ぞおほかりける、それを今家の信具の稱名の混亂せしめて、極樂に往生せんとするこころはおぼつかなきぞこの垂誠なりサレバ南無阿彌陀佛トマウス六字ノ體ハイカナルコ、ロゾトイフニ

三帖目 四百十四
 阿彌陀如來ヲ一向ニタノメバホトケソノ衆生ヲヨクシロシメシテス
 クヒタマヘル御スガタヲコノ南無阿彌陀佛ノ六字ニアラハシタマフ
 ナリトオモフベキナリとは、叢林集に名號六字を信心のすがたごも
 往生成就のすがたごもすくひたまへるすがたごもいへり、この三の
 すがたはみな一なりと知るべし、機法一體の正覺の果名なればなり
 こと。記事珠にも、五帖一部の中六字を信心のすがたごもあり、六字
 を往生成就のすがたごもあり、六字を一切衆生の平等にたすかりつ
 るすがたごもあり、御言すことこなれども全一なりと知るべしと
 あり、いかにもみなくのいへるにはたがはざれども、このすがた
 の文字はいづれにあたりといふ事をも、心得おくべき事なり、み
 な體の字のころにてのたまへるなり、信心の體とは、すなはち念

佛行者の安心の體なりと、信體すなはち行體の六字のほかなき事を
 すがたごのたまひて、機法一體の六字機法一體の六字安心とな
 る事なり、これすなはち所聞の名號、行者の心想中に印現したるこ
 ころなり、筆をもつて文字を書くだす如くに、ならべてはこぶ一念
 歸命にはあらず、聞の當位すなはち信にて、聞といふは佛願の生起
 本末を聞いて疑心ある事なし、これを聞といふとは、聞ごころすなは
 ち疑心ある事なき信なるを示し、聞といふは如來の御ちかひを聞て
 うたがふころのなきなりと、聞ごころすなはちうたがふころな
 き信なるむねを示したまふなれば、すがたごある所は、みな聞
 名の一念六字の體を得て、南無阿彌陀佛に身をまるめ、六字のぬし
 ことなる事なるがゆへに、機法一體の正覺の果名なるがゆへに、全く

御 文 講 話

一なりといふべき事なり。シカレバユノ阿彌陀如来ヲハイカ、シテ
 信シマイラセテ後生ノ一大事ヲバダスカルベキヅナレバ、あるより
 アラアリガタノ阿彌陀如来ヤ、あるまでが、白紙に板木の文字のう
 つりたるが如く、所聞の名號の行者の心中にあらはれて、機受の全
 體となりたる信順信受の安心なり。カヤウノ兩山ノ御恩ヲバイカ、
 シテ報シタテマツルベキヅヤタ、南無阿彌陀佛、トコエニトナヘ
 テソノ恩徳ヲフカク報盡マウスバカリナリトコ、ロウベキモノナリ
 こは、上には、聲にいたしてこなふるばかりはおぼつかなしこあり
 たるを、聞名信ののちなれば、口業讚嘆の聲にいたしてこなへよこ
 稱名念佛せしめたまへるなりといたゞくべし。

第五通

願願相對之章

御 文 講 話

抑諸佛ノ悲願ニ彌陀ノ本願ノスグレマシ、タルソノイハレヲクハ
 シクダツヌルニこは、諸佛の悲願と彌陀の本願とをたくらべて、彌
 陀は超世の大願なるむねを明したまへるがゆへに、願々相對といふ
 ものなり、いづれの諸佛にも衆生無邊誓願度の慈悲のちかひはまし
 ませごも、いたりて罪深き衆生と五從垢穢の女人は、たすかりがた
 きゆへに、極重悪人無他方便唯稱彌陀のこゝろにて、諸佛淨土をす
 めたまへる事、六方恒沙の勸讚に彌陀の名號をあたまへるが
 如し、これが世にこへたる大願のありがたきわけなり。サテ彌陀如
 來ノ超世ノ大願ハイカナル衆生ヲスクヒマシマスヅトマウセバ十惡
 五逆ノ罪人モ五障三從ノ女人ニイダルマデモミナコトクモラサ
 ズダスケタマヘル大願ナリこは、阿闍寶生の淨土も、密嚴華藏の寶

三帖目
四百十八
刹も、亂想の凡夫はかげをもささず、具縛のわれらはのぞみをたへたり、然るに阿彌陀如來の本願は、十悪五逆もみな攝して、さらはるゝものもなくすてらるゝものもなし、安養の淨土は、謗法も闡提もひこしく生れて漏るゝ人もなく残る人もなし、諸佛淨土にきはれたる五障の女人はかたじけなく、聞名往生の益にあづかり、無間のほのほにまつはるべき五逆の罪人は、すでに滅罪得生の證をあらはす、されば超世の悲願もなづけ不共の利生も號す」とあり、此持名鈔は蓮師傳燈の聖教なれば、このころにて示めさせられたるものなり。サレバ一心一向ニワレヲタノマン衆生ヲバカナラズ十人アラバ十人ナガラ極樂へ引接セントノタマヘル他力ノ大誓願力ナリとは、引接は引取といふ事にて、和讃にも衆生引接のためにとて

稱我名字と願じつゝ、若く不生者ごちかひたりごあり、その引接たまへるには千引の石は千人かゝりて引ごこく、石よりおもき極重惡の罪人を、極樂へ引たまへるごこ、他力の力の本願力にて、引取たまふといふ事を、他力の誓願力なりと示めさせられたる者なり、和讃のひだりかなには「ミチビキトルトイフハテニトルコ、ロナリ」とあり。コレニヨリテカノ阿彌陀佛ノ本願ヲバワレラゴトキノアサマシキ凡夫ハナニトヤウニタノミナニトヤウニ機ヲモチテカノ彌陀ヲバタノミマイラスベキゾヤとは、本願をばなにごやうにたのみ、彌陀をばなにごやうにたのみをばなにごやうにたのみ、本願たのみをたのみをわかちのあるやうに、問ひをおこして、その本願をたのみをこたへてしもの文に、それ彌陀如來の本願ごまうすは、かゝ

御 文 講 話

るあさましき機を本ほんとすくひまします、不思議ふしぎの願力がんりきぞと深く信じ
てご示しめして、本願ほんがんたのむの義ぎとし、次つぎにつゞきて、彌陀みだを一心いん一向きやう
にたのみたてまつりてご示しめして、彌陀みだをたのむ義ぎとし、次つぎにつゞ
きて、他力たうりきの信心しんといふことを、一いこゝろうへしごして、信心しんの體たい
は、一いの名號なごうなれば、本願ほんがんたのむも彌陀みだをたのむも、二にの差別さつべつはな
き事ことをつまびらかにしたまへる教示けうじの巧妙きやうなる事こと、甘味かんみすべし、本
願ごんたのむも彌陀みだをたのむを差別さつべつして、異計いけいをなすものもありたる
は、このあたりの示しめしには解脱げだつの耳みみもなかりたるなるらん。世間
ニイマ流布りゅうふシテム子トス、ムルトコロノ念佛にふつトマウスハタ、ナニノ
分ぶん別べつモナク南無阿彌陀佛なんむあみだぶつトバカリトナフレハミナタスカルベキヤウ
ニオモヘリソレハオホキニオボツカナキコトナリごは、この時代じだいの

御 文 講 話

世間流行せけんりやうの念佛にふつは、ウレシサナムカシハソデニツ、ミケリミケリの分ぶん際さいな
る念佛にふつにて、雜行正行ざうぎやうしやうぎやうの分ぶん別べつもなく、念佛にふつだにもまうせば、往生わうじやう
るごばかりおもひたるを、何なにの分ぶん別べつもなくごのたまへるおもむきな
り、口くちにだにもごもあり、たゞ聲こゑに出いだしてごもあるは、みな正雜しやうざの
分ぶん別べつをき、わけざる聞不具足もんふぐそく信不具足しんふぐそくの口稱くしやうにて、歡喜踊躍くわんぎやうやく乃至乃至
念ねんの相續さうぞくする安心起行あんしんきぎやうのうれしみは知らずして、かの助念佛じよねんぶつの風情ふうじやう
なりたるならん。京田舎きやうたなノアヒタニテ淨土宗じやうどしゆしゆノ流義りうぎマテ、ニ
ワカレタリシカレドモソレテ是非しぜいスルニハアラズごは、鎮西ちんせいの六流りくりゆう
も、一條流いちじやうりゆうの禮阿らいあ、三條流さんじやうりゆうの了惠りやうゑ、小幡流せうはんりゆうの慈心じしん、いづれも京都きやうとな
り、蓮師れんしの頃ころまでは、九品寺長樂寺くしゆんじやうりやくじの法流はふりゆうもありたりごみゆれば、
多念義たねんぎも諸行義しよぎやうぎもありてまち／＼なりしならん、西山せいざんも四派しはいにわか

御 文 講 話

るれども、みな京にあり、鎮西の寂惠流の白旗、尊觀流の名越、性眞流の藤田は田舎にて、其外西鎮二流の諸檀林田舎にあまたある事なり、遊行派一向派のおごり念佛までもまち／＼なる中につらなりて、西山鎮西九品長樂寺、そのほかあまたにわかれたり、之みな淨土一家のごもがらなり、これを流義まち／＼たりごのたまへるもの也。シカレドモソレヲ是非スルニハアラズごは、他流の所談に是非は沙汰したまはざる事、先の章の御示めに同じ。ワガ開山一流相傳ノチモムキチマウシヒラクベシごは、他流未談の宗教なり。解脫ノ耳ヲスマシテ渴仰ノカウベチダレテコレチキ、テ信心歡喜ノオモヒチナスベシごは、示珠指記事珠のいふごころ、みな解脫を得の耳をすますの義ごすれども、解脫の耳をすましてごある語勢は、解

御 文 講 話

脫をうるの耳をすませごのたまへるごはきこへがたし、叢林集は何ごもいはず、解脫ノ耳渴仰頭、ごかきたるばかりにて上にも下にも○をつけて、解脫渴仰ごかきたるのみにて、一言もいはずはいはぬはいふにいやまさるごおもひたるなるべし、いかにも大經の清淨解脫三昧も、觀經の解脫解脫知見も、涅槃經の百句解脫も、みな佛境界の事なり、解脫光輪も眞解脫も、愚夫／＼のかたぶける耳の事にはあらず、然るを今解脫の耳をすましてきけごあるは、阿難みづから座をたちたるを佛の聖旨を承て、卽座より起たりご説、韋提の樂生極樂を安樂世界をゑらばしむご、恩徳廣大釋迦如來の教勅なりごしたまへるが如く、今日われらが耳の穴いろくろき浮塵根さゝわけ悪しき勝義根に、涅槃眞因たる他力廻向の大信心をさゝうるは、

御 文 講 話

佛よりきかしたまはれる宿善開發の耳の穴ぞいふ事を、解脱の
 耳をすまして示したまはりたるならん、これらの事は鑿説にても
 損のゆかぬ事なれば、いろくこいふて見て、有難くよろこぶほご
 が徳なり。渴仰のこごばも渴して水をしたふが如く、仰ねがひて聽
 聞せば祖師聖人の化導によりて、法藏因位の本誓をき、歡喜むねに
 みち、渴仰膽に銘するならん。ソレ在家止住ノヤカラ一生造惡ノモ
 ノモこいふより、攝取不捨トイフハ念佛ノ行者ヲ彌陀如來ノ光明ノ
 ナカニオサメトリテスタマハズトイヘルコ、ロナリごあるまでは
 文のまよみたてまつりてよろこぶべし、そのなかにも、ダスケ
 タマヘトオモヒテ餘念ナキコ、ロナ歸命トハイフナリご示したま
 へるごころ、阿彌陀佛の四の字のこゝろを、攝取不捨の義ごしたま

御 文 講 話

へるあたりをわけてきをつけて拜見すべし。サレバコノ南無阿彌陀
 佛ノ體ハワレラナ阿彌陀佛ノダスケタマヘル文證ノタメニ御名ヲコ
 ノ南無阿彌陀佛ノ六字ニアラハシタマヘルナリトキコエタリごは、
 支證はたしかなる證據ごいふ事なり、八ヶ條に、阿彌陀佛ノムカシ
 法藏比丘タリシトキ衆生佛ニナラズハワレモ正覺ナラジトナカヒマ
 シマストキノ正覺スデニ成シタマヒシスガタコソイマノ南無阿彌
 陀佛ナリトコ、ロウベシコレスナハチワレラガ往生ノサダマリタル
 證據ナリごあるに同文同意なり、これらの御示しは、みな安心決定
 鈔をほめて、四十餘年見れごも見もあかず、こがねをほり出すやう
 なる聖教なりごて、ほり出したまひたるごころなりご知るべし、支
 證のこごばは、記事珠にくはしく吟味して、改邪鈔にも大平記にも

御 文 講 話

ありて、その外字典魏書南山濟縁の疏記韻府等を巻づけ丁づけま
 てくはしき事なり、むかしの學者達は何ひこつも麁略なる事なし、
 感嘆すべき事なり。コノウヘニハヤヒトタビ彌陀如來ニタスケラ
 レマイラセツルノチナレバ御タスケアリツル御ウレシサノ念佛ナレ
 バコノ念佛ヲバ佛恩報謝ノ稱名トモイヒマタ信ノウヘノ稱名トモマ
 ウシハンベルベキモノナリとは、一念をもつては、往生治定の時刻
 定め、その時の命のふれば、その往生の治定をよろこび、ほこ
 ぎすなきつるかたをながむればたゞありあけの月ぞのこれるこなき
 たるあさをながめたるが如く、一念發起せしごきに、その機をよく
 しろしめして、光明のうちにをさめこりて、阿彌陀の三字の攝取不
 捨おさめたすけすくひたまへる有難さのあさをながめなきつるかた

御 文 講 話

こいふ如く、御たすけありつるかたをよろこぶを、佛恩報謝の稱名
 とも、信の上の稱名ともいふぞこ示めたまへるなり。報恩の稱名
 は、唯能常稱の論文、初祖龍樹よりの相承、信の上の稱名は口傳鈔
 の名目にて、高田覺信の最後の報謝念佛の表題として、信の上の稱名
 の事とあるを傳へたまひたるものなり。たゞし第十八の因願なる乃
 至十念の稱名には、一念已後の報謝なりとも名のほごこしがたけれ
 ば、末代無智の章の如く第十八の念佛往生の誓願のこゝろなり、か
 く如く決定しての上には、いのちのあらんかぎり、稱名念佛すべ
 きものなりと、報謝のこごばはなき所が、決定しての上の念佛にて
 信の上の稱名なり、然れば因願と成就とのわかちありて、開山一流
 の相傳として、解脱の耳にきかしむるに、諸佛の悲願に彌陀の本願

を相對して、本願力大願力といふときは、因願がりのかた六字の名體をくわしく心得て、かくの如くこゝろえわけぬれば、往生は治定也、ハヤたすけられまいらせぬる身ぞよるこぶは、成就がりなるがゆへに、今章にてこの名目を二ならべて、報謝ごもいひ、信の上ごもいふごおしへさせられたるものごうかゞはるゝなり。

第六通

專修專念之章

夫南無阿彌陀トマウスハイカナルコ、ロヅナレバマヅ南無トイフ二字ハ歸命ト發願廻向トノフタツノコ、ロナリ○マタ南無トイフハ願ナリ阿彌陀佛トイフハ行ナリ○サレバ雜行雜善ヲナゲステ、專修專念ニ彌陀如來ヲタノミタテマツリテタスケタマヘトオモフ歸命ノ一念ヲコルトキカタシケナクモ遍照ノ光明ヲハナナテ行者ヲ攝取シタ

マフナリ○コノコ、ロスナハチ阿彌陀佛ノ四ノ字ノコ、ロナリ○又發願廻向ノコ、ロナリ○コレニヨリテ南無阿彌陀佛トイフ六字ハヒトヘニソレラガ往生スベキ他力信心ノイハレテアラハシタマヘル御名ナリトミエタリとは、此一通にて五帖一部八十通の教意をうかゞひ知るべし、專修專念に彌陀をたのみごあるも、餘章にはなき事なり、かるがゆへに表題して、專修專念之章と稱したてまつりしなり五帖一部は御ことばのまゝをいたゞきて、仰のごほりをうけて、信じよるこぶのみなるを要すすべき勸章なり、けれども義解學問の沙汰におよばんごするときは、章主大權の聖者すら、教行信證六要鈔表紙の破さふらふまで御覽ありて、御文を御作さふらふなれば、われら如きの凡僧は、表紙も本紙も數百部よみやぶりたりとも、義解

をつくすべき事にはあらざるこそ勿論なり、然れば、聖意をうかゞふには、數章の御ことばを照し合せては伺ひく指をそめて、味を
知の風情にもいたるべきならんか、御文の來意鈔といふつくり冊子
の如きは、あげて評するものにもあらざれども、龍象たる學匠の考
られたるにもたらぬ事も、もらされたる事もあるべし、ましてわれ
ら如きの鼠雀にもおされるもの、豈あへてせんやおそれむべき事
なり、かるがゆへにひろくはあきらめがたきがゆへに、あごさきの
御文面によりて今章を拜見するに、
夫南無阿彌陀佛とある發端より、他力信心のいはれをあらはしたま
へる御名なりとみえたりとあるまでを、うかゞふには、同章の中に
ては、南無阿彌陀佛の六の字のいはれをよくき、開きぬれば、報土

に往生すべき他力信心の道理なりと、こゝろへられたりとある一言
にて、一通の始中終をうかゞふべき事なるべし、その始は、最初
に、夫南無阿彌陀佛と申はとあり、中は、南無を歸命と發願廻向
との二とし、又南無が願なり阿彌陀佛は行なりとし、光明攝取を阿
彌陀佛の四字のこゝろとし、又發願廻向のこゝろとし、これにより
て南無阿彌陀佛といふ六字は、われらが往生すべき他力信心のいは
れをあらはす、御名なりとし、それを他力信心の道理としてあり、
終は、南無阿彌陀佛の廻向の讚を以て、始の南無阿彌陀佛と、中
にて示めす歸命も發願もみな廻向の法なるむねを明して、唯能常稱
の偈を以て、信行を具足したる一行三昧南無阿彌陀佛のあるじとな
り、南無阿彌陀佛に身をまるめ衣のゑりをたゝかれて、この南無阿

彌陀佛よといはるゝやうになりたる身から、佛の御恩をおぼしめさ
んに、こそくはさふらふべからずの常行大悲の稱名念佛すべきも
のなりにて、あなかしこそくいたるところが一通の始中終也。
そもくこれより文義をうかゞふに、南無を、歸命と發願廻向との
二なりとは、南無といふは、歸命なりとあるときは、機受の邊にて
行者歸命の一心といふものなれども、亦これ發願廻向の義なりとあ
るときは、如來已に發願して廻施したまふの心なれば、佛のかたよ
りあたへまします信心なり、然れば、機受の歸命と、廻施の發願と
一の南無が二のころなるなり、これを他章にてらしてみるとき
は、南無と歸命する機受一念のころに、發願廻向のころあるべ
し、これすなはち彌陀如來の凡夫に機受を廻向しますこそくろな

りこそ、獲得せしめたまへるに同じ、又他章において、南無といふは
歸命、またこれ發願廻向の義なりといへり、そのころいかなぞな
れば、阿彌陀如來の因中に於て、我等凡夫の往生の行をさだめたま
ふとき、凡夫のなすころの廻向は、自力なるがゆへに成就しがた
きによりて、阿彌陀如來の凡夫のために御身勞ありて、此廻向を我
等にあたへんがために、廻向成就して、一念南無と歸命するころ
にて、此廻向を我等凡夫にあたへましますなり、かるがゆへに、凡
夫の方より、なさぬ廻向なるがゆへに、これをもて如來の廻向をば
行者のかたよりは、不廻向とまうすなり、此いはれあるがゆへに、
南無の二字は歸命のころなり、又發願廻向のころなりとこしめ
したまへり。和讃にては、彌陀智願の廻向の信樂まことにうる人に

三 帖 目
四百三十四

て、如來の廻向に歸入して願作佛心を得たるごころこれなり、御本書にありては、信の卷本末二卷に明したまへる御法門にて、表紙のやれ候まで御熟覽のうへにて、御文を御作なされ候ごはごの事なり
 マタ南無トイフハ願ナリ阿彌陀佛トイフハ行ナリごは、はじめに南無阿彌陀佛ごまふすはごある六字を釋したまへるに、又この義もいふべしごの示めしなり、六字を釋するには、言南無者の六字釋々なるがゆへに、南無ごいふは歸命なり、歸命は往生のためなれば、またこれ發願なる義にて、すなはち願なり。阿彌陀佛ごいふは、即是其行なれば、南無にはなれぬ阿彌陀佛にて、願にはなれぬこれ行なり、その願行を廻向の義なりご釋成して、聞信の一念に南無阿彌陀佛の廻向の恩徳廣大なるごころ、すなはち大經の至心廻向にて、廻

向は本願の名號をもつて十方衆生にあたへたまふみのりなりごは、此一通の始中終に明したまへる御勸化のおもむきなり、かへすくも義解の邊にてはわれら如きの力量のものいへばいふほど、義の淺略にきこへもするなりもする事ぞつたなき。コノユヘニ願成就ノ文ニハ聞其名號信心歡喜トトカレタリごは、この引文成立また巧妙なり、はじめの六字をオホヤウニキクニアラズヨクキ、ヒラクごころ他力信心の道理ごして、聞其名號の義を知らしめ、聞信不具足にならざるを、上來明したまへる章句の義理ごして、聞も信も如實にならしめ、その如實の信心歡喜のびゆきて心々相續して、他相間難なく淨土の往生はうたがひなく、おもふてよろこびく、いのちのふれば自然ご多念におよびつゝ、念佛のいきたゆるまでのごころをのべ

三帖目 四百三十六
たまひし始中終なり、わがかきしふみながら殊勝よとも仰られ、大
原談義のうはさをうつしてすがたを見れば、法然房こそばをきけば
彌陀の金言と仰られたるも、これらの御文のこそなんめり、有人の
講辨に、信心歡喜の歡喜は、後々相續の歡喜にはあらずといへり、
世間の筆記にもものこりてあるへしと、うたてこそありける、一座
の法談に、肝要は拜讀の御文といひながら、信心歡喜といふは
信心さたまりぬれば、淨土の往生は疑ひなく、おもふてよろこぶこ
ゝろなりとあるを、信の一念の當相にかぎりたる歡喜のここにて、
信後相續の歡喜にはあらずと談ずるに、口には拜讀の御文といふて
も、目には拜にても讀にてもなき目くら坊なり、われこそはなかわる
にてありし。コノユヘニ彌陀如來ノ五劫兆載永劫ノ御苦勞ヲ案ズル

ニモワレヲヤスクダスケタマフコトノアリガタサタフトサチオモ
ヘバナカクマウスモオロカナリとは、ふるき學者たちの解釋には
歎異鈔の文をひきて、聖人つねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願
をよくく案ずれば、親鸞一人がためなりけり、とあるをいだし、
又口傳鈔の文をひきて、五劫の思惟も兆載の修行も、只親鸞一人が
爲なりとおほせこそありきとあるをいだし、語燈錄の永劫修行はた
れがため、その文や、向阿のことは、心を五劫の思惟につくし、
身を兆載の修行にくだきてたてたまへる願ぞかゝとあるを、出され
たる事いづれも、有難き事なれども、此一章にていふことは、五
劫も永劫もかみに明したまへる南無阿彌陀佛の成たまひし事を、よ
ろこびたまへる心ろなりとさうかゞへば、一通の始終を一貫して、章

主の冥慮みやうりよにもかなふならん、然しかれば五劫ごこつも永劫えいこつも、はじめの夫南無阿彌陀佛あみだぶつごまふすは、いかなることゝろぞごある御たごはのむすびごめなりごこゝろえて、五帖目の第八通だいはつとうに、ソレ五劫思惟ごつしゆいノ本願ほんがんトイフモ兆載永劫ノ修行しゆぎやうトイフモ南無阿彌陀佛なむあみだぶつトイフ本願ほんがんヲダテマシマシテ南無阿彌陀佛なむあみだぶつトナリマシマスごある御たごゝろなる事をうかゞひあはすべきごこなり。サレバ和讃わさんニイハク南無阿彌陀佛なむあみだぶつノ廻向くわうノ恩徳おんたく大不思議だいふしぎニテごは、安心報謝あんじんほうしゃの次第しだいにて、その報恩ほうおんに上かみの名號みやうごうの恩徳おんたくをひきつらねて、初祖龍樹しよそりゆうじゆより相承さうじやうの應報おうほう大悲弘誓恩だいひぐぜいたんにてむすびおはらせられたるなり。行住坐臥時ぎやうじゆうざゐじ所諸縁しよしよゑんヲキラハズ佛恩報盡ぶつおんほうじんノタメニタゞ稱名念佛じやうみやうぶつねんスベキモノナリごは、男女貴賤なんにょきせんごこゝろく、彌陀みだの名號稱みやうごうしやうするに行住坐臥ぎやうじゆうざゐも簡かんれず、時處諸縁じしよしよゑんもさはりなしごあ

る、往生要集わうじやうしゆのこゝろにて、源信和尚げんしんわうしやうの釋文しやくもんに、往生之業念佛わうじやうしよふみやうぶつ爲本ほんごあるを、法然上人ほふねんしやうじんの選擇集せんじやくしゆへ相承さうじやうして、南無阿彌陀佛なむあみだぶつ往生之業念佛わうじやうしよふみやうぶつ爲本ほんごかきたまひし、黒谷一代くろやうだいの弘興ぐわうきやうなる勢至圓通せいしえんつうの念佛ねんぶつも、みなごこゝろく、唯能常稱ゆゐのうじやうしやうの念佛ねんぶつに同じて應報おうほう大悲弘誓恩だいひぐぜいたんに結歸けつきするむねを、さごしたまへる悲化ひけごこそいたゞかるれ。

第七通 彼此三業之章

抑親鸞聖人おししんらんせいじんノス、メタマフトコロノ一義いちぎノコ、ロハヒトヘニコレ末代濁世まくだいじやくせいノ在家無智ざいけむちノトモガラニナヒテナニノワヅラヒモナクスミヤカニトク淨土じやうどニ往生スベキ他力信心たうりきしんノ一途いちとバカリヲモテ本トナシヘタマヘリごは、鎮西ちんせいの聖光上人せいこうしやうじん、西山せいざんの善惠上人ぜんゑしやうじん、九品寺くひんじの覺明上人かくめいしやうじん、人は、いづれも法然上人ほふねんしやうじんの御弟子おんでしにて、同じ一師いちしの門流もんりゆうなれごも、

安心は同じからざるゆへに、其他流を簡びて、ソモく親鸞聖人ノ
ス、メタマフトコロトのたまひたるなり、他流にても他力を談じ、
信心も沙汰すれども、天親曇鸞の正意なる利他廻向の義を談ぜざる
ゆへに、今家相傳の本願力廻向の他力大信心は相違する也。ソレ阿
彌陀如来ハスデニ十悪五逆ノ愚人五障三從ノ女人ニイタルマデユト
く、クスクヒマシマストイヘル事チバイカナル人モヨクシリハンベ
リヌとは、悪人凡夫を其まゝにて、本願の正所被の機ごしたまへる
事は知らぬものなく、芥子は辛もの砂糖は甘ものご知りたるごも、
知りたるのみにてはその味ひは知らざるが如く、悪人正機の本願ご
は、たれも知りけれども、知りたるのみにては、信受の法味は知ら
ざるゆへ、これを知らざるを他門とするの分際なり。シカルニイマ

ワレラ凡夫ハ阿彌陀佛チバイカヤウニ信ジチニトヤウニタノミマイ
ラセテカノ極樂世界ヘハ往生スベキゾトイフニゴは、イカヤウニ信
ジチニトヤウニタノミゴゴはをたがひにして、信ごたのむご同じ
こゝろなる事をも知らしめたまへるなり。彌陀如来チ信ジタマツ
リテゴは、涅槃眞因唯以信心の信の巻をのへたまへるなり。ソノ餘
ハチニゴトモウチステ、ゴは、次下の彌陀に歸し本願を信じて、二
心なきすがたを示めしたまへるなり、和尚の一向論主の一心これな
り。カナラズ極樂ニ往生スベシゴは、上のいかやうに信じなにごや
うにたのみて、極樂世界に往生すべきやこいふに、こたへて餘の善
にうつらず、餘の佛をたのまず一向に歸し、一心に信すれば極樂世
界に往生するご示めて、むすびたまひたる也。ソモく信心トイ

三帖目 四百四十二

フハ阿彌陀佛ノ本願ノイハレヲヨク分別シテ一心ニ彌陀ニ歸命スル
 カタヲモテ他力ノ安心ヲ決定ストハマウスナリとは、智慧學解をも
 ちて分別せよごにはあらず、下の文に南無阿彌陀佛ノ六字ノイハレ
 チヨクコ、ロエ分タルヲモテ信心決定ノ體トスごあることにて、觀
 經の章提得忍の華座觀に、佛汝が爲に苦惱を除く法を分別解説すべ
 し、汝等憶持して廣く大衆の爲に分別解説せよご、あるが如く、唯
 明かに聽て、信心を決定すること也。シカレバ南無ノ二字ハ衆生ノ
 阿彌陀佛ヲ信ズル機ナリごは、衆生のかたには彌陀を信するほどの
 機はなくして、無始より眞實の信心はなきものなり、かるがゆへに
 佛のかたにその信する機をも名號に成就してあたへたまひて、聞信
 の一念ごならしめ、信心ごて六字の外にはあるべからずご、南無阿

彌陀佛ごたのませたまひてむかへたまへる、南無阿彌陀佛の廻向の
 恩徳廣大不思議なる御ごごはり、彌陀の名をきうるごごのあるな
 らば、南無阿彌陀佛ごたのめみな人ご示めしたまへるごごころにて、
 假名聖教にては、一念南無阿彌陀佛ご歸命する佛智不思議の妙願力
 ご判じたまへる義門にて、御本書信の卷にては、一切群生海無始よ
 り已來清淨の心なし、眞實の心なし。如來清淨の眞心を以、圓融無
 碍不可思議不可稱不可説の至徳を成就したまひ、如來の至心を以、
 諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施し給ふ、卽是利他の眞心を
 彰す故に、疑蓋雜ごごなし、斯至心は卽是至徳の尊號を其體ごすご
 ありて、涅槃經の一道清淨にして、二ある事無の文を引て、眞實は
 如來なり如來はすなはち眞實なりの義を明したまへるごごころにて、

すなはち次下の彼此三業不相捨離の義門に同ずるところをべし。次ニ阿彌陀佛トイフ四字ノイハレハ彌陀如來ノ衆生ヲタスケタマヘル法ナリコノユヘニ機法一體ノ南無阿彌陀佛トイヘルハコノ心ナリコレニヨリテ衆生ノ三業ト彌陀ノ三業ト一體ニナルトコロヲサシテ善導和尚ハ彼此三業不相捨離ト釋シタマヘルモコノコトハ、安心決定鈔の機法一體と、定善義の彼此三業と同義ぞとたまへるところにて、法談にてもするもがらはわけてわきまへおくべき事なり。マツ機法一體といふ事は、祖釋には、漢文にも和語にもこの名目ある事なし、其義の極成してある事は、信の卷の三信の釋意をはじめ、彌陀の智願海水に他力の信水いりぬるも、廻向をふかく信ずるも廻向の信樂なりければ、彌陀智願の廣海に、凡夫善惡の心水

も歸入しぬれば、すなはちに大悲心とぞ轉ずなるも、所聞の名號行者の思想中に印現する廻向利益、他の眞實信心にて衆生の方の白紙に、六字の機法印現してたすけたまへとふかくこゝろに疑ひなく一念無疑となりたるこゝろ、大悲心と轉じたる佛心と凡心とひとつになりたるすがたなれども、それを機法一體なりとのたまひたる祖釋の名言はなき也。六要鈔にも願々鈔にも、機法一體になりてといふ所一ヶ所づゝ見ゆれば、名目なきにはあらざれども、今章にて機法一體のこゝろなりと釋成したまへるほどの本據にもあらざれば、全く安心決定鈔の機法一體の名目を、おしたてゝ示めたまへるに必せり、これがかの四十餘年見れども見もあかず、こがねをほりいだす如きの聖教ぞと、決定鈔を讚嘆したまへるところなるべければ

三帖目 四百四十六

機法一體の名目は、金玉の如き名言と見えたり、安心決定鈔の判断は、讚岐寶嚴の書たる歸命本願訣に、願生歸命辨を對破するごき縷々辨別して、西山義の抄物なりとすれども、夫を又未熟の談として覺如上人の眞撰なりと決斷するもある事にて、眞宗の學問いまだなかばをすぎずといふなれば、つとめて學ぶべき事なり、又あやまりのはなはだしきにいたりては、此機法一體を生佛不二の義に解して拜まず秘事の腰刀とするものあり、生佛不二といふものは、猿樂歌にていふなれば、一念化生の鬼女と成て、目前に來れども、邪正一如ごみるごきは、色即是空そのまゝに佛法あれば、世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳はみどり花はくれなるのいろくごうたふも、又あしたの嵐夕への雨

けふ又あすのむかしぞごきだめなき世に、古川の水のうたかたわれいかにごうたふも、持戒破戒をえらばず、有無の二邊におつる事なく、みな成佛するためしなり、柳はみどり花はくれなるなる其いろくをあらはせり。青陽の春のあしたには、谷の戸いづるうぐひすの、こほれるなみださけそめて、雪解の水のうたかたに、あいやごりするかはすのこゑきけば、心のあるものを目にみぬ、秋を風にさゝ、萩の葉そよくふる里の田の面におつる雁なきて、稻葉の露の夕時雨、妻こひかぬるさほしかの、たゞすむ月を山に見て、ゆびをわする、おもひあり。浦のみなごのつり舟は、うをゝえてうへをすつみねのあらしや、谷の聲、みなこれ三界唯心のこごはりなりと思召し、心をさごりたまへやごくせまひするも、生佛一如の理談なり。

御 文 講 話

おもしろの花のみやこや筆にかくこもおよばじ、東には祇園清水おちくるたきの音羽のあらしに、地主のさくらはちりく、西はほふりんさかの御寺、まはらばまはれ水ぐるまの輪のりせんせきのかわ浪、川柳は水にもまる、しだり柳は、風にもまる、ふくらすゞめは竹にもまる、都の牛は車にもまる、茶臼はひき木にもまる、實にまごこわすれたりごよこきりこは、放下にもまる、こきりこの二の竹の世々をかさねてうちおさまりたる御代かなご、かつこをうちけるは色即是空といふ物にて。唯一葉のひるがへる風を行衛を御らんぜよといふ處なり、これが生佛一如のさきり、禪宗の常談にて、天台の一心三觀も、三諦圓融もみなこの心法をみかくの外なし、それを彌陀の他方法へもちこみて、佛凡一體機法不二なりと

御 文 講 話

て、一休ばなしの草冊子をもてあそび、豊島がいふやうなる何がきく、何か見るのなぞがけ、安心をよろこぶもの尾張の國にては、阿古井村にもありし、美濃の國にては和泉村にもありし、名はわすれたれども、其同行の集會する日には、かならずゆき合せて出言させていましめたる事もありたり、うたひの長文句をかきたるはいたづらごこに似たれども、眞宗他力の法門に、機法一體も佛心凡心一ツになるもあるごころ、謠ひ本ならべ見て似ても似つかぬ雪さすみ、歸佛の一念と生佛不二と同じかるべき物なるやご、俗人のしる物にてさごしぬ、空假中の三諦も維摩の一默雷の如くも、愚夫愚婦には通ぜざれば、手習子供も知りて居る、うたひの文句にて、生佛一如を知らしめて、十劫安心、拜ず秘事の根だやしをせんがために

猿樂うたを出したるなり。アヒカマヘテ自力執心ノワロキ機ノカタ
ナバフリステ、タ、不思議ノ願力ゾトフカク信シテ彌陀ヲ一心ニタ
ノマンヒト八十人八十人ナガラミナ眞實報土ノ往生ヲトグベシコは
自力執心のワロキ機のかたは、彼無始より已來の心なり、不思議の
願力ぞ信ずるは、他力廻向の眞實心なり、これを眞實信心うる人
こいふなり。彌陀ヲ一心ニたのむこは、今章はじめに起さき、他力
信心の一途ばかり、餘はなにこそもうちすて、一向に歸し一心に
信じてさありしをむすびて、彌陀を一心にたのむこいひ、又はじめ
にいかやうにたのみて、極樂に往生すべきぞさありしをむすびて、
願力を信じ彌陀をたのめば眞實報土の往生をさぐべしと示めしたま
ひたるものなり。

第八通

寶山空手之章

抑此頃當國他國ノ間ニ於テ當流安心ノオモムキ事外相違シテコは、
奥の年號月日をみれば、加賀越前に居住のころなれば、當國コは加
州越州にて、その外諸國の安心まちくなる折から見えたり、當
流の安心このほか相違すこあるは、このほかにはわづらはしき秘
事こいひて、ほこけをもおがまぬ者はいたづらものなりとある、お
がまず秘事のたぐひ、十却信心も善知識もみな當流の安心に相違す
る邪義不正義の法門なり。コレマコトニアサマシキ執心ナリコは、
越前にひろまる處の秘事法門こいへるコは、更に佛法にてはなし、
淺間しき外道の法也。此秘事をなをも執心してこある、執心にて誠
に淺間しき執心なり。寶ノ山ニ入テ手ナムナシクシテカヘランニコ

三帖目 四百五十二

トナランモノカさは、摩訶止觀四の二の中に、徒らに生れ、徒らに死てひきつも獲べきことなきは、寶の山に入て手を空くして歸が如ごあるによりたまへり、佛説にては寶山無手のたごへ、華嚴經にも心地觀經にもあり、大論にもある事にて、諸註にみな引出す事なれ共、手を空くして歸るが如しご、空手而歸の言は、止觀のみなるゆへ今の言句は止觀の全文なりご知るべし。コトナランモノカさあるの字はスのあやまれるなるべしご示珠指は治定して、異ナラン者歟トハ恐ハ異ナラヌノ寫誤ナルベシごいふ。記事珠は「コトナランモノ歟トハランノ反ルナレバコトナルモノ歟コトナラヌモノナリト也ごいふなり。今おもふに、下の第十一通の毎年不闕の章に、ソノ御恩ナシラザルモノハマコトニ木石ニコトナランモノ歟ごあるも同

じことにて、これも木石にことならぬもの歟」の義ごするごきは、ランは、ヲヌノ誤なるべしごいふごころなれごも、現文を直して自義を成ずるはおそれある事也、文のまゝにて義を成ずるをよしごす近頃佛曆について、普門律師の須彌山儀等に、四天下四季の交代を佛説のまゝにて明されしを、その弟子の中より、四時異同辨ごいふ書を出して、四天下四季同時にあらざれば、曆數密合せざるごて、日月東行の説を企て、手先下役の者にさづけて須彌山儀の銘序も和解も滅亡せしむれごも、佛説のまゝ、師説のまゝにて、曆算密合するなれば、佛をころし師をころして、異説を骨張するは奇をこのむのは甚だしきなり、律師は東叡王府御藏板の佛國曆象篇にも、須彌山儀銘序利解にも、實驗須彌界説等にも、悉く四天下四季交代の佛曆

法を明せり、今其一文を出ば、須彌山儀銘序の文に、四洲を四季の交代するや、厥象太著しとありて、これを和解して律師自註釋して曰、四季ヲ交代スルトハ若南洲春分ナレバ、北洲ハ秋分、東洲ハ夏至、西洲ハ冬至、四方各九十日ニシテ、四天下互ニ四時二十四節氣ヲ異ニス、其象限太明著ナリといへり、これにて曆數密合するがゆへに、同じく銘文に、其没分や密にして、其氣盈や精なり、是を以歲實天と適に合す、其減分や天に府し、朔虛眞に合、是を以朔實適に精當なりとて、これを亦自註釋して曰、没分は日天毎日の周長五十二秒奇にして、日周九百分の十三にて、氣盈一百九十五にて一年の積五日一百八十羅婆とし、減分は月天の毎日二萬二千五百六十九由旬餘七百三分日の十一にて、一月を二十九日五十三刻餘とす

これらのことをかさねて、銘序のべて歲實朔日等を求めるに、時憲曆と密合するところ秒微までに至れり、大なるかな眞聖の爲、豈默信せざるべけんやとありて、和解の十九紙のころには、ひとつ／＼算術にかけて、滅没氣盈朔虛閏餘等を推歩して、授時曆の歲周は強ここ、一分五十一秒、西法の歲周は、秒微までに密合す、氣盈も授時曆は梵曆より強ここ、六秒二十七微にて、時憲曆等の西法は適に密合すとあり、四天下四季同時の説は、ゆめ／＼普門律師にはなき事にて、滅後の邪義にきはまれりと知るべし、大寒氣由旬辨覽にも、かきたる如く、短級深井におよばずして、師説をなみするものごもなり、今此寸珍にて評するは、上の猿樂歌よりも、長文句の傍論なれども、須彌山の事は四王天にも、等活地獄にも入用にて、

寸珍は法談師もみる事あらば、かの佛語を駁し師説を破して、無間地獄に下入するものにもなふ事なからしめんが爲に、因に傍論を加へ残すも、護持佛法の寸志なればなり、○然ばコトナランもコトナラヌに書替て、寫誤なるべしとせず、現文の儘にてコトナランにて拜見すべし、コトナランはコトナレルにて、コトナラヌはコトナラザルなり、木石に異なるものか、木石にこそならざるものか、思熟して見よの御勸化にて、御恩を思知りたるか思知らざるかご、うちかへしておもへこの勸誠と戴べし、然れば、今の寶の山に入て、手をむなしくしてかへるにこそなれるものか、こそならざるものかよく／＼思熟せよの御示しと頂戴すべし。其信心ノ相違シタルコトバニイハク夫彌陀如來ハステニ十劫正覺ノ初ヨリ我等カ往生ヲサダ

メタマヘル事ナイマワズレズウタガハザルガスナハチ信心ナリトバカリコ、ロエテ彌陀ニ歸シテ信心決定セシメタル分ナクバ報土往生スベカラズとは、世に十劫秘事といふものをあさましき執心なりとて、教示したまへるなり、この十劫信心の異解は拜まず秘事といふもの、如く、佛法にてはなし淺間しき外道の法なりとも、いましめたまはざれば、外道といふほどの事とも見へざれども、あまねく流行する示珠指にも、十劫秘事の新義を破す科し、記事珠にも十劫秘事を執して、當流の正義にそむくごあれば、龍象たる古老の秘事と稱しきたれるはしかるべくして、しかるならんごもおもほゆれば我のみ十劫信心と稱して、秘事ごはいひがたしごかたよるもひがみたるならんか、みる人はこゝろにまかさるべし、其安心の正不を辨

別せし事は、二帖目の第十一通につくせり、ふりかへりて見るべし
 凡夫ノナストコロノ廻向ハ自力ナルガユヘニ成就シガタキニヨリテ
 阿彌陀如來ノ凡夫ノタメニ御身勞アリテユノ廻向ヲ我等ニアタヘン
 ガタメニ廻向成就シタマヒテ一念南無ト歸命スルトコロニテ此廻向
 ナ我等凡夫ニアタヘマシマスナリカルガユヘニ凡夫ノ方ヨリナサヌ
 廻向ナルガユヘニコレヲモテ如來ノ廻向ヲ行者ノカタヨリハ不廻
 向トハマウスナリゴハ、法然上人の三經釋に、阿彌陀如來因位の時
 兆載永劫の修行を衆生に廻向したまふ、濁世の我等が依怙、末代の
 衆生の出離是にあらざば、何をか期せんや、是に依て彼佛も我建超
 世願ごなのりたまへりご示したまふ、此如來の大廻向を不廻向ご名
 づくる事は、選擇集に廻向不廻向對の名目を立たまへり、これによ

りて和讃に、この名目をもちて、眞實信心の稱名は、彌陀廻向の
 法なれば、不廻向ごなづくるご示し、行の卷には凡聖自力の行に非
 ず、かるがゆへに不廻向の行ご名づくるなりご定判したまへり、凡
 夫のなす廻向は、自力にて成じがたしごは、善導の釋文には、凡夫
 は虚假不實貪瞋邪偽奸詐百端にして、悪性やめがたし、事蛇蝎に同
 じ、晝夜十二時急走急作して、頭然をはらふがごこく、身心を苦勵
 すごも、すべて雜毒の善虚假の行ご名くごも、又たごひ清心をおこ
 すごいへごも、水に畫がごこしごもありて、自力運心の成じがたき
 むねを明して、成じがたきごを決判あり、これを悲歎述懐の和讃
 にしめして、虚假不實ノコノ身ニテ清淨ノ心モサラニナシ、貪瞋邪
 偽オホキユヘ奸詐モ、ハシ身ニミテリ、修善モ雜毒ナルユヘニ虚假

ノ行トゾナツケタル、無慚無愧ノコノ身ニテマコトノコ、ロハナケ
 レドモ彌陀ノ廻向ノ御名ナレバ功德ハ十方ニミチタマフ、ごあるご
 ころみな善導の釋意なり、これすなはち凡夫の廻向は成じ難きによ
 りて、彌陀廻向の法をもちゆるの義なりご知るべし、これみな大經
 にありては、普爲大施主普濟諸貧苦の義、爲衆開法藏廣施功德寶の
 義にて、令諸衆生功德成就これなり。御恩德ノ深遠ナルコトヲ信知
 シテごは、大悲深して重罪のものをすくひ、利益遠して未來際をつ
 くしたまふ、文類聚鈔の慈悲深遠如虛空のこゝろなりけり。憶念彌
 陀佛本願の偈頌を引たまへるは、はじめに十劫安心をいましめて、
 彌陀に歸して信心決定せしめたる分なくば、報土往生すべからずご
 あるをむすびごめて、憶念彌陀佛即入必定の安心を定めて、其土は

報謝の稱名にて、安心報謝の次第を明白ならしめたまひたるなり。

ソバサマナルワロキコ、ロエナリごありしは、雅語にはソハシキソバ
 キソバ、シクごもありて、マサシキ正本にあらざるをいふ言葉に
 て、俗語にもソバに居るソバに居られぬなごいふ側の字傍の字の訓
 にて、正本ならざるのこごばなり、今も宗意安心の正本にあらざる
 不正義なるをソバサマナルワロキコ、ロエごのたまひたるものなり

第九通 鸞聖人之章

抑今日ハ鸞聖人ノ御明日トシテごは、文明七年五月二十八日書之ご
 あれば、祖師聖人の御忌日の御文なり、忌日のこごを命日ごも、明
 日ごもかきたる事ご見へて、其時代の實悟記にも、命日明日たごひ
 にごりまごへてかきてあれば、いづれも通用したる事ご見へたり、

命いのちのきれたる日ひなれば、命日めいじちといひしものか、速夜明日たいやめいじちと云心いよこころにて前日ぜんじちの夜よに對たいして當日たうじちを明日めいじちといひしものか、本據ほんこは知しり難がたし、古來こらいの學者がくしゃたちは、顯密共けんみつともに當日たうじちに於たいて聲明しょうめいを修しゆす、かるがゆへに聲こゑ明日めいじちの中略ちゆうりやくとして、明日めいじちの解げをなし、命いのちを捨すてたる日ひなるがゆへに、命終日めいじゆうじちの中略ちゆうりやく捨命日しやめいじちの上略じやうりやくとして、命日めいじちの解げをなし、明日めいじちは無明むみやうを去さりて本明ほんみやうにかへる義ぎなりともいひ、又明まためいは命めいの借音しゃくたんなりともいひ、或あるひは人死ひにせしして神明しんめいとなる日ひなれば、明日めいじちに作つくるとして、灌頂經くわんとくきやうの不信人ふしんじん死し神明しんめい更生めいさうの文もんを引ひき、家語けごにいてたる明器めいきのこゝを引ひき劉焯りゅうせきが釋しゃく名みやうにいふ、送死そうしの器きのこゝを引ひき、その外楞嚴ほかりやうげんにより要覽ようらんによりて、其出據そのしゆつこを吟味ぎんみせし舊説くせつみなくはしき事ことなり、つとめてまなへるの所しよ詮せんなりといふべし、然しかれども、吉田兼好よしたけんかうの存命ぞんめい中に、四條河原しじやうがはらのす

ゞみにゆかれたるに、徒然草つれづれぐさの講談かうだんと標札へうさつある茶店ちやみせにたちよりて、聞きかれければ、作者さくしやの兼好けんかうの心こころにはおもひよらぬ事ことどもを談だんじけるを一笑せうせられしといふ事ことあり、これもまた一興きやうなる事ことなり。本願ほんげん他力たうりきノ眞實しんじつ信心しんじんヲ獲得かくとくセザラン未安心みあんじんノトモガラハ今日けふニカギリテアナガチニ出仕でしタイタシユノ講中かうちゆうノ座敷ざしきヲフサグチモテ眞宗しんそうノ肝要かんようトバカリオモハン人ひとハイカデカワガ聖人せいじんノ御意ごいニハアヒカナヒガタシシカリトイヘドモワガ在所しよじよニアリテ報謝ほうしゃノイトナミチモハコバザランヒトハ不請ふじゆニモ出仕でしタイタシテモヨロシカルベキカゴは、未安心みあんじんはいまだ安心あんじんせざる事ことにて、いまだ決定けつじゆうせざるを未決定みけつじゆうといふに同じその未安心みあんじんのこもがら、御命日ごめいじちばかりに義理ぎりか役やくのやうに、講中かうちゆうの座ざに着つてもいがでか祖意そいにかなふべきやと示しめしたまへるなり。い

かてかはなにござしてさいふ事なり、上の章の文にも、一流のうちをひてしかしかさ、その信心のすがたをもえたる人これなし、かくの如くのやからはいかてか、報土の往生をばたやすくござべきや、一大事さいふはこれなりさあるも、今の座しきふさぎの一例たるごもがらのござなり、和讃にてはいかてか女身を轉すべき、いかてか眞宗をささらましの、いかてかにて、何とて轉すべきぞ何とてささるべきぞのござなりと知るべし。不請の出仕とあるは、請もごめて出志はなけれども、その所にありての講會ゆへに、不請に座につきても、佛祖をも拜し勸章をも聽なれば、たへて出ぬものにはまされるをあたへて示めしたまへる也、安心にていへば三業歸命は悪しけれども、無歸命にはまされるが如し。サレバ毎月二十八

日ゴトニカナラズ出仕ナイタサントオモハントモカラゴは、サンハスハンハフなるゆへに、出仕ナイたスべしごおもフ人のござなり。日コロノ信心ノトホリ決定セザラン未安心ノヒトモゴは、このそこには、しかさしたる決心のなきを、自身には未安心なりと知りたるほどの輩をさしたまひたるならん。スミヤカニ本願眞實ノ他力信心ヲトリテゴは、難値難見猶靈瑞華の他力信のここにて、如來出世の本意なる説微妙法たる、開佛知見の本願眞實のここなり。ワガ身ノ今度ノ報土往生ヲ決定セシメンコソマコトニ聖人報恩謝徳ノ懇志ニアヒカナフベケレゴは、歳末の禮にも信をこりて禮にせよごあるが如く、大悲のむねをやすむるにすぎたる報恩はなきこのおもむきにて、何を手向てもまひらせても、衆生のかたに信心の佛因をた

くはへざれば、大悲の御むねはやすまりたまはざるゆへなり、然るに自ら信じ、人をも教て信ぜしめ、大悲を傳へて、あまねく化益すれば、眞に佛恩を報ずる理を成ずることの義にて、次に引用の往生禮讚の文意これなり。定善義にも、聞て即信行せん者、身命を惜まず急に爲にこれを説、若一人をも苦を捨生死を出ここを得せしむる者は、是を眞の報佛恩と名づく、即諸佛本願の意に稱とあるに同じ。符合セルモノナリとは、割たる竹の合目のくひちがひなきが如く、釋文のこゝろに合りこのたまへることなり。夫聖人御入滅ハスデニ一百餘歳ヲ經トイヘドモ目前ニテ眞影ヲ拜シタテマツルとは、祖師の御入寂の弘長二歳壬戌よりは、二百五十三年の後にいたりて文明七年五月二十八日に今章御述作なれば、二百餘歳を経とあるべ

きなり、かるがゆへに示珠指は一之字二之字に作べき歟とも、又は報恩講式文のまゝをうつしたまへる歟といふ、記事珠は式文によるにしても、弘長二年より永仁元年までは、二十三年なり、貞治元年の加句の式文とすれば、一百一年になるを今章にうつしたまひたるならんごせり、慧空古老の叢林には、祖師入滅の弘長二歳壬戌より蓮師誕生の應永二十二年乙未まで、一百五十三年なれば、その死生の中間に約してのたまへる歟といふ、今寸珍におゐて別考なし、德音はるかにへだてごも、實語を耳のそこにのこすごある語勢、いかにも百五六十一年もへだちてのおもむきごもおもはれければ、叢林古老のいふごころを長じたりとするのみ。又德音ハハルカニ無常ノカゼニヘダツトイヘドモマノアタリ實語ヲ相承血脈シテアキラカニ耳

三帖目 四百六十八

ノソコニコシテ一流ノ他力眞實ノ信心イマニタエセザルモノナリ
 ごは、上の恩顔に對して、德音ごあること報恩講式文の中に、恩顔
 は寂滅の煙に化したまふといへども、眞影を眼前に留む、德音は無
 常の風に隔といへども、實語を耳の底に貽すごあるをうつしたまひ
 たるなり、目前の眞影これ恩顔なり、耳底に貽る實語これ德音なり
 恩と徳との相對にて、寂滅無常も對句なり、眞實の二字を眞影實語
 ごある事ごも、心を配りて拜讀すべし、相承血脉ごあるは、相承の
 血脉ありて、其血脉を相承するごある意ご知らるゝなり。イマコノ
 時節ニイタリテ本願眞實ノ信心ヲ獲得セシムル人ナクバマコトニ宿
 善ノモヨホシニアヅカラヌ身トオモフベシごは、恩顔を見る實語を
 きく生死出離の時節到來なるを、むなしく日夜を明し暮して、永劫

三帖目 四百六十九

苦海にしづみけるは、無宿善のものなりこの御悲嘆なり。モシ宿善
 開發ノ機ニテモワレラナクバムナシク今度ノ往生ハ不定ナルベキコ
 トナゲキテモナチカナシムベキハタコノ一事ナリごは、示珠指に
 は、我等の二字宿善開發の上に於て見るべし、我等宿善開發の機な
 らば、信心を獲得すべし、若然らずば、今度の報土往生は不定なり
 嘆き中の嘆き悲み中の悲みなるべしご、記事珠には世人多くこの御
 文言を不審におもふ類あるは、和文のものは倒語をさらはざるを會
 得せざればなり、若われら宿善開發の機にてもなくばごいふべきを
 われらの詞を下に置たまふばかり也、四帖目の初通に念佛往生の根
 機は、宿因のもよほしにあらざば、われら今度の報土往生は不可な
 りごみえたりこのたまふに、意同じ、若われら宿善開發の機にあら

三帖目 四百七十
ずば、往生は不定なるべしとなり、われらの言を蓮如上人御一人にかけて、ワレといふ往生の先達ナクハといふ御言ご、錯解するゆへに、蓮如上人いまさずば、衆生の今度の往生は不定なるべしご、御自慢の御言ご心得て、種々に料簡すご云々、これ假名文の體を心得ざるゆへ、御文言の趣を解し得ざるのみご。叢林集にはわれらなくばごは、上の若の字の上におきて見るべし、我等若無宿善の機ごいふ心なり、それをあやまりてワレラなくばごは、ユノ蓮如なくば、今度の往生不定なるべしご、御自慢の御詞ナリといふ人ありごぞ、笑ふべし云々ごあり、いかにも諸註のいふ如く、彌陀如來のワレラをたすけましますごありても、ワレラを彌陀如來のたすけましますごありても同じ事なるは、世間にてはワレ男にてあるならばごいふ

を、男にてワレあるならばごいふも、ワレに病氣なくばごいふを病氣もワレになくばごいふも同じ事にて、今もワレラ宿善開發の機にてもなくばごいふ事を、宿善開發の機にてもなくばご仰られたるなり、然れども叢林のいふに可笑ごあるにつきて、御文につきては記事珠のいふ如く、和文のものは倒語をきはざるを會得せざればなりごのみいふべくにもあらず、いかにもく一文不知の尼入道へ對しての勸章なれば、會得なきはもつごもなり、記事老すなはち筆をさりて、世人多くこの御文言を不審に思ふ類ありご書たる、その多くの世人のかたを正所被の機ごする御文なれば、叢林のごごく笑ふべしごのみいひすてたるも、こゝろなきに似たり、信心の一途においては、きゝあやまる事をいましむるは常談なれごも、これらのこ

三帖目
四百七十二
ごはき、あやまるをも笑ふにはおよばず、宿善のつぎにある善知識なれば、善知識なくばいたづらごとなりご、教授の恩徳をよろこぶ事、祖師聖人の御身より、法然上人をうやまひて、本師源空いませずばごのたまへる如く、蓮如上人いませずばごよろこぶ尼入の仰信なれば神妙なりご稱美して、ごもに同心すべきごとなり、笑ふにおよばぬごごなり、播磨の國にて聞しごごあり、ある寺に一切經を買得して堂内に積置たるを、朝時参りの婆々これを見て、住持に對し澤山に御和讃を申入たまへるよごいひけるゆへ、住僧のこたへに、これは和讃にはあらず、一代經なりごいへば、婆々それをきゝて、それは何人のつくりし物ぞやご、住持のいはく釋迦如來の説たまひたる物なりご、婆々の又いふに、その釋迦如來は御開山よりはあご

なりやさきなりやご、住持のいはく、開山よりは二千餘年のさきなりご、婆々のいはく、さてく残念なる御事かな、御開山よりさきに生たまひて、此御宗旨は聽聞したまはず、われらはいかなる宿縁にて、御開山より後の世に生れてかゝる御宗意を聽聞して、御あごをしたひ極樂へまひるごごのありがたさよご落涙しけるごご。末燈鈔に故法然上人は、淨土宗の人は愚者になりて、往生すご候ひしごごをたしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおぼえぬあさましきひごごのまひりたるを御覽じては往生必定すべしごてゑませたまひしをみまひらせ候ひき、文沙汰してさかくしきひごのまいりたるをば、往生はいかゝあらんごたしかにうけたまはりき、いまにいたるまで、おもひあはせられ候なり」ご示めしたまへるに

三 帖 目 四百七十四

照しみれば、この婆々や往生しつらん。シカルニイマ本願ノ一道ニ
 アヒガダクシテマレニ無上ノ本願ニアフコトナエタリマコトニヨロ
 コビノナカノヨロコビナニゴトカコレニシカシタフトムベシ信ズベ
 シは、高僧和讃曇鸞の章に、萬行諸善ノ小路ヨリ本願一實ノ大道
 ニ、歸入シヌレバ涅槃ノサトリハスナハチヒラクナリとある、大道
 のことにて、信の巻に、道の言は路に對す、路は則是二乘三乘萬善
 諸行の小路なり、道は則是本願一實の直道、大般涅槃無上の大道也
 とある、一無碍道にて、愚禿鈔の本願の一乘は、頓極頓速圓融圓滿
 の教なれば、絶對不二の教一實眞如の道なりとある、一佛乗の一道
 にて、同一念佛無別道故の大道これなり。無上の本願にあふとは、
 本願力にあひぬればのごころ、本願力を信ずるにて、本願他力をた

のみつゝの安心を得たることなり。ナニゴトカコレニシカンとある
 は、イツ、の不思議をこくなかに、佛法不思議にシクヅナキのこゝ
 ろに同じ。コレニヨリテ年月日ゴロワカゴ、ロノワロキ迷心ヲヒル
 ガヘシテは、行者のわろき自力のこゝろにてはたすからずとある
 自力の心をひるがへせしめしたまへるなり、最要鈔に曰、この信
 心をばまことのごころよむうへは、凡夫の迷心にあらず、またく
 佛心なり、この佛心を凡夫にさづけたまふごき、信心といはるゝな
 りと。眞要鈔に曰、一念歸命の信心は、凡夫自力の迷心にあらず、
 如來清淨本願の智心なりとあるをてらしあはせてみるべし。本願一
 實ノ他力信心ニモトヅカンヒトハ眞實ニ聖人ノ御意ニアヒカナフベ
 シとは、一乘一實の無碍の信海に入なば、冥慮にかなひ御命日の報

恩謝德ならんこの御勸化なり。

第十通 神明六ヶ條

抑當流門徒中ニテヒテユノ六ヶ條ノ篇目ノム子ヲヨク存知シテ佛法
ヲ内心ニフカク信シテ外相ニソノイロヲミセヌヤウニフルマフベシ
こは、篇目のむねを内心にたくはへて、外相に見せざるを宗要とす
るの一章なり、篇簡章を成て、條目をかきならべたるを篇目とい
ふなり、今は六箇の條目のことなり。當流ノ念佛者ニテヒテワザト
一流ノスガタヲ他宗ニ對シテコレヲアラハスコトモテノホカノアヤ
マリナリこは、其時代にはわけて、當流を誹謗して、折々宗難のあ
りしも諸神をうごみ、諸宗をあさまにいふ門下のありて、害となり
たることこのありたるならん、他宗他人に對しての遠慮を示めしたま

へるのあまたたびなるにて知るべし、今の世にも家の内にて、神の
名をいふも雜行なり、竈を荒神といふも宗祖のこゝろにかなはず、
只クドといふべしこ、下女下男にも示めすものありこそ、その下人
他の家に行てはかたりつたへて、他宗のそしりともなるべし、然れ
ども、村々町々にも、氏神あれば、神事にはたがひにまねきあふて
祭するはおかし。一神社ヲカロシムルコトアルベカラズ○一切ノ神
明トマウスハ本地ハ佛菩薩ノ變化ニテマシマセドモコノ界ノ衆生ヲ
ミルニ佛菩薩ニハスコシナカヅキニク、オモフアヒダ神明ノ方便ニ
カリニ神トアラハレテ衆生ニ縁ナムスビテソノチカラヲモテタヨリ
トシテツ井ニ佛法ニス、メイレンガタメナリコレスナハチ和光同塵
ハ結縁ノハジメ八相成道ハ利物ノチハリトイヘルハコノコ、ロナリ

こは、このころをかたるに、一の事縁をもつて示めさば、常陸の國の鹿島明神は、宗祖親鸞聖人同國稻田にて、佛法弘通の本懐をこげさせられ、六角堂の夢想符合せりこのたまへる、専修念佛のひろまれるとき、幽栖をしむこいへごも、道俗あこをたつね、蓬戸をこづこいへごも貴賤ちまたにあふれる、隨一に化人日々聽法のうへ御弟子となりて、法名信海ご申うけ、其謝禮に此御草庵には水のなければさて、井戸の水を寄附し、佛前には戸帳を奉納せんさて、虚空をまねき鳥の飛きたるが如く、錦の戸帳のふりくだりしことごも、井戸水もわが祭禮の日はこしに、一度は水をかへしてたまはれこ、今の世までも其約束のたがはざる奇瑞をこめめのことされし、其信海なりしは、件の鹿島明神にてましませしこと、祖師聖人の御眞筆に

て、授たまひし法名の社檀の中にありしより、神前の七重の戸帳のランケイの錦一枚なく、七ツ井戸なる清水の一ヶ所は、一滴もなく虚井戸となりてありしに、社職のこもがら感嘆せし由縁舊記にいちじるしく、人口いまに異論なきころにして、又法道仙人の舊跡たる播州石峯寺の山中、鹿島明神の示現ありし舊跡其所を鹿島ご字して、其地の百姓の長たるものは、今も鹿島何某ご名乗ける、おもふに時風秀行のたぐひなる人、其地に留まりたるならんも知らず、山の峯には、法道仙人の舊地にて、古像の觀音堂あり、深き谷間には鹿島明神のほこらありて、古き石燈籠いづれにもみな鹿島の銘あり社務は長たる鹿島氏のこもがらなり、其地にても、開山聖人の靈縁のむね神託のありけりさて、石峯寺の僧房に、親鸞聖人の遺像を畫

て、安置崇敬して、後には數房淨土眞宗の末流を汲ける、むかし畫きたる時の繪相は、香色の衣に金襴の五條袈裟をめさしめたる眞影にて、今大阪の高庵に安置せる御影これなり、且他宗なり且むかしなり、繪相も不案内にて、又自分皆官僧なるがゆへ、祖師の御影にも、禁官衣をめさしめたてまつりたるならんか、御銘讚にてもあるべきところに、文字かけながらに見へれども、字形みな損じて一字もよみ得がたし、見る人珍妙なりとす、神社考に常陸の國鹿島より、白鹿に駕櫛の枝を鞭こして、伊勢の國名張に到り、中臣の連時風秀行侍従す、夫より大和の國阿倍山に入、次に三笠山に至て三神に告て一所になりたまふ、齋主の命は下總の國香取より來り、天兒屋根の命は河内の國より移り、姫大神は伊勢の國より從ひ來りた

まふ、鹿島明神は武甕槌の命なりとあるは、神護景雲のころなればはるかむかしの事なれども、折々出現して、諸國にあそをたれたまへる事と見へたる、度賀尾の明惠上人、鹿鷲の解脱上人とを、太郎次郎との給ひて、したしみたまへども、明神の御對面には、明惠には直にあひたまひ、解脱には翠簾をへだてあひたまひぬ、我にへだつる心なし、解脱が慢心我をへだつるなりと明神の仰ありしと、和論語に見へたれば、祖師親鸞の我慢勝他の心なく、われはこれ教信沙彌の定なりとて、非僧非俗の愚禿と名のり、善惡の文字をもしらぬ人はみなまことのころなりけるを、善惡の字しりがほはおほそらごこのかたちなり、是非しらず邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなれども、名利に人師をこのむなりとのたまへるを、みそ

なほし知ろしめす、神慮なるがゆへに、戒師として法名をも申うけ
 たまひ、謝物も進じさせたまひたるものなり、鹿島は春日の明神な
 れば、春日龍神の猿樂歌にて、佛法をあがめたまへる神慮のほごを
 も、金春觀世のごもがらの、おそれなくうたひけるをきこしめさる
 も、神慮のしからしむる神國の風俗こそありがたけれ、白拍子の
 今やうをうたひて、鹿島香取それ戸隠よご、舞遊びけるも結縁なら
 ん。一を聞ては萬をしれ、佛法を信じ念佛をもまうさん人をば、神
 明はあながちにわが本意とおぼしめすべしとは、此事なることをし
 和光同塵八相成道は、諸註みないふ止觀の文輔行の釋老子經の沙汰
 近くは諸神本懷集の二十四紙の左に、一切の神明ほかには佛法に違
 するすがたを示し、内には佛道を勸むるをもてこゝろざしとす、こ

れすなほち和光同塵の本意をたづぬるに、しかしながら八相成道の
 來縁をむすばんがためなるゆへなり、このゆへにふかく生死のけが
 れをいむは、生死の輪廻をいごふいましめなり、つねにあゆみをは
 こばしむるは、勤行精進をすゝむるこゝろなり、然れば、ほかには
 生死をいむをもてその儀とすれども、うちには生死をいごふをもて
 本懐とす、うへには潔齋を精進とすれども、したには佛法を行ずる
 をもて精進とす、譬々たるつゞみのひゞきは、生死のゆめをおごろ
 かすたよりなり、颯々たるすゞのこゑは長夜のねふりをさますな
 だちなりと示したまへるこれなり、謠の文句にも、和光のちかひあ
 らたにて、塵にまじはる神慮かなと、うたひけるもこのことなり、
 八相とは上天下天託胎出胎出家成道轉法輪入涅槃ともかぞへる、又

兜降卒託胎降生踰城降魔成道說法入涅槃ともいふて、大經のはじめにある、處兜卒天弘宣正法は、上天なり、捨彼天宮は下天なり、降神母胎は託胎なり、從右脇生現行七步よりしもは出胎なり、棄國財位より以下は、出家の相なり、現五濁刹より成最正覺までが成道なり、釋梵祈勸請轉法輪より、常以法音覺諸世間とあるまでが、説法の相にて、轉法輪といふものなり、光明普照無量佛土より、總攝魔界動魔宮殿衆魔怖怖は降魔の相にて、この一ツを八相に加へてかぞふるときは、上天下天を一相として、出家降魔轉法輪と次第してかぞふるなり、次の示現滅度の以下は、入涅槃の相にて、この大經は一時來會の菩薩を嘆德して、千方に遊歩して權方便を行じ、無量世界におゐて現じて等覺を成じたまへる事を、釋迦如來の現成正覺に

同せしめてあるところなり、この八相は利物の終りなり、利物とは物を利益するといふ事にて、物とは衆生の事なり、利他圓滿の佛身を爲物身とあるが如く、善導の釋文にも、娑婆の化主物の爲の故に想を西方に住せしむとあり、華座觀の釋なり、開きて見るべし、其八相利物のはじまりは、塵に同ずる神慮にて、諸神本懷集にある八幡大菩薩の御託宣に、我昔出家名法藏即成報身位淨土今來娑婆世界中即爲護念念佛人とのたまへるは、われむかし出家のときは、法藏と名づく、すなはち報身を成じて、淨土に住す、今娑婆世界の中にきたることはすなはち念佛の人を護念せんがためなりといふことなれば、本地は法藏正覺の阿彌陀如來たるがゆへ、八幡の本地堂は小堂ならずして、本地佛阿彌陀如來といふ標札を出し、毎年十月の十

三帖目 四百八十六

五日は酉の刻より戌の刻まで開扉ありて、諸人の群詣市をなす事也
 又祭禮には山をのぼるは天子行幸の如くにみへて、山をおりるは崩
 御ありての葬禮のさまなり、見る人みな知れる事なり。サレバイマ
 ノ世ノ衆生佛法ヲ信シ念佛ヲモマウサン人ヲバ神明ハアナガチニワ
 ガ本意トオボシメスベシコは、アナガチハ強の字疆の字にて、弓に
 力ありと註する字にて、つよくひきつけるをいふことばを、あなが
 ちこいふなり、念佛の信者をつよくひきよせ、ひきつけて神慮に納
 受あること神詠に「千はやふるたまのすだれをまきあげて念佛のこ
 るをきくぞうれしき」、こあるが如きを強に本懐におぼしめすこと示め
 したまへるなり。二二ハ諸佛菩薩トマウスハ神明ノ本地ナレバイマ
 ノトキノ衆生ハ阿彌陀如來ヲ信シ念佛ヲマウセバ一切ノ諸佛菩薩ハ

ワガ本師阿彌陀如來ヲ信ズルニソノイハレアルニヨリテワガ本懐ト
 オボシメスガユヘニ別シテ諸佛ヲトリワキ信ゼテドモ阿彌陀一佛ヲ
 信シタテマツルウチニ一切ノ諸佛モ菩薩モミナコトククコモレル
 ガユヘニタマ阿彌陀如來ヲ一心一向ニ歸命スレバ一切ノ諸佛ノ智慧
 モ功德モ彌陀一體ニ歸セズトイフコトナキイハレナレバナリトシル
 ベシコは、淨土和讃の智慧光佛の左訓に、「一サイシヨブチノチエチ
 アツメタマヘルユヘニチエクロウトマウスオリ一サイシヨブチノホ
 トケニナリタマフヲハコノアミダノチエニテナリタマフナリ」こあ
 るにて、入も出も一佛一切佛にて、其本師本佛は、阿彌陀佛たるこ
 こは、般舟經の三世諸佛依念彌陀三昧成等正覺の文、楞伽經の十
 方佛刹中の法報身應身及變化身皆無量壽の極樂界中より出の文、其

三 帖 目 四百八十八
外往生要集第三卷の十五紙の左にある、一切諸佛身即是一佛身一心
一智慧力無畏も亦然なり。一佛を思惟すれば、即一切佛を見る、一
佛功德の無量無邊なるを念ずれば、無量諸佛の功德と無二なり、不
可思議の佛法は等して分別なし、皆一如に乗じて正覺を成ず。阿彌
陀佛を念ずれば、即是一切佛を念ずるごある經釋の諸文、彌陀の淨
土に歸しぬれば、すなはち諸佛に歸するなりの讚文をも合せて、善
導大師の法事讚にある上從海徳初際如來乃至今時釋迦諸佛皆乘弘誓
悲智雙行不捨含情三輪普化の文も、大經にて、無量壽佛の威神功德
不可思議を讚嘆して、聞其名號の信心を得せしめたまへる、十方恒
沙諸佛如來もみな極樂の華光出佛なる説相も、唯信鈔文意に、無碍
光佛の御かたちは、智慧のひかりにてましますゆゑに、この如來の

智願海にすゝめられたまふなり、一切諸佛の智慧をあつめたまへる
御かたちなりごあるも、諸神本懷集に本地の佛菩薩は、ごごごご
彌陀一佛の智慧なれば、彌陀の名號稱するに、十方三世の諸佛おの
づから念ぜられたまふごあるをも、みなくごりあはせて拜見すべ
し、われ事美濃生國にありて、十五歳ばかりのとき、船付村本覺寺
より開板ありし、往還二種廻向辨に善美をつくしてのべられしを見
て、少年ながらも有難くおぼへたる事、わすれがたく引文の連續は
六十年もむかしの事なれば、老忘したりけれごも、其辨主は江州彦
根西覺寺了雲の門人ごきこえて、さすがに西婦庵の學風にて、道心
あつく殊勝なりし事なり、了雲の著述をみるにいつれも道心をささ
ごして、筆せられたるおもむきのあらはれてあるぞたふごかりける

あの學風はまここに隨喜すべき事なり。三ニハ諸宗諸法ヲ誹謗スル
 ヌトオホキナルアヤマリナリソノイハレスデニ淨土ノ三部經ニミエ
 タリこは、所談まぢくなる他宗門をさして、諸宗のた玉たる者
 なり、乃八宗九宗のここにて、法相宗三論宗華嚴宗天台宗眞言宗律
 宗俱舍宗成實宗これを入宗といふなり、日本にてもふるくつたはる
 宗旨なり、このうへに祖師の御代の御ことばに、佛心宗とは、この
 世にひろまる禪宗これなりと見へたるを加へて、九宗となるなり、
 これに法然上人にてひらけたる淨土宗をならぶれば、日本の十宗と
 いふものなり、其淨土宗より法相三論律宗禪宗等をみな他宗諸宗と
 いふなり。諸法とは、其宗々の法脈にて、まづ法相なれば唯識唯心
 を宗意として、三界唯一心心外無別法と説たまへる華嚴經、諸識所

緣唯識所現と説たまへる解深密經等の諸大乘經によりて立たる宗法
 也、宗祖は天親菩薩にて、玄奘三藏慈恩大師等の傳燈にて、日本に
 ては南都の七大寺の宗旨にて、人のよく知りたる法隆寺もしかなり
 と知るべし、三論なれば不生不滅不去不來不一不異不斷不常の八不
 の正觀を宗意として、一代諸教に勝劣を論ぜず、龍樹菩薩の中論百
 論提婆菩薩の十二門論によりて、三論宗と名のり、嘉祥大師を祖師
 として、二藏教をたて、一代を判じ、聲聞藏の小乘は、斷惑修入の
 二乘法、菩薩藏の大乗は、成佛得果の菩薩法とす、因緣所生法我説
 即是空亦名爲假名亦是中道義と談ずるこれなり、華嚴なれば、三界
 唯心染淨同體と觀するを宗意として、本覺圓明の體にかなふを妙覺
 果滿のくらゐとして、一乘究竟の妙談とす、天竺の三藏佛馱跋多羅

の翻譯なる六十卷、實義難陀の翻譯なる八十卷、般若金剛の翻譯なる四十卷を、七處八會の説といふて、大方廣佛華嚴經によりて、先照高山の大法、十重玄門海印三昧の義門、理智無邊の願行、普賢の一毛孔に入て、法界所有の凡聖互に融即圓滿し、微塵數不可説の世界三輪山海三塗四洲欲色無色年劫成壞迷悟苦樂咸悉く包容して、普賢の毛孔中にあること、大海の波瀾を卷て、一滴中におくが如しとする事、龍樹菩薩の龍宮にて、九十日徧覽の華嚴經は、十萬偈四十八品と四十九萬八千八百偈と、十三世界微塵數の偈頌ありし經本なりしとぞ、これらを釋せられし法藏法師の探玄五教章、澄觀法師の隨疎演義等の釋文、以下諸註に述せらるゝ法門の甚深の不可言説法なり、ほめもそしりもなるべきものにあらず、いづれも釋迦一代の

説經なれば、如説に修行せば、いづれもその益あるべしとの示めし夫聖教萬差なり、いづれも機に相應すれば巨益ありと、平太郎に示したまへるはありがたき祖師善知識の御ことば也、同じお祖師のお上人のこいはれても、諸宗無得道論を作りて、諸宗無得道法華獨成佛と、末弟ごもに廣宣流布ならしめんごする輩は、まことにあやしき心中なり、無得道論は日蓮宗身延山日遠の作、又其宗祖日蓮の作に立正安國論一卷あり、近年京都にて拜ませたり、開祖ほごありて文筆見事なりし、みな選擇集の破文也。天台なれば、一念三千三諦圓融の觀をこらしめて、煩惱即菩提生死即涅槃とささらしむるを宗意とて、煩惱業苦の三道は、法身般若解脱にして、法報應の三身なりと觀達せしむ、其行法には、三種止觀四悉檀等の名目ありて、三

觀佛乘の理に達する事、六十卷の法華三大部に明せるところ今つくすべきにあらず、其相承するところは、釋尊にて、一乘純圓たる法華經を説たまひしより、付法藏の弘傳相つぎて、北齊の慧文禪師、龍樹の中觀論を大藏中にこり得て、一心三觀を開覺し、これを南嶽の惠思禪師につたへ、それを天台の智者大師といふ智顛國師につたへ、其智者大師より章安大師につたへ、それより智威慧威玄朗と相承して、其次に世に荆溪と號し、妙樂大師と稱する、湛然の時に釋籤疏記弘決を述せられて、六十卷の法華三大部圓備せり、この大師に上足四人ありて、道邃道暹智度行滿といふ、日本の最澄なる傳教大師入唐の時は、この道邃行滿より天台の教觀を傳て歸朝したまひて、比叡山を開きて法華を弘めて、もろこしの天台山をうつしたま

ふ、其のち慈覺大師入唐して智者大師より、第八世の法脉宗顚にあふて、止觀の妙義を研究し、又五臺山の玄鑑福林寺の良諤にあふて受學して歸朝あり、その後智證大師入唐して、法華の妙談を傳へて日本にかへりたまへるに、慈覺と智證との流義兩派にわかれ、その後惠心と檀那と兩院の學風たちわかれて、二流となりけれども、圓融天真の月を澄し、實相朗然の華を玩のほかなし、妙法蓮華の題目を唱て、成佛するこのみいふが如きの淺近なる法華宗にはあらざれば、誹謗すべからずと示したまひたるをおもひ知るべし、念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊諸宗無得道法華獨成佛といふて、念佛となへるものごもの首をきりて、由井ヶ濱にさらさば功德になるといふが如きの日蓮法華は、にくてらしきものなれども、あの機類は佛法無

縁のものごもゆへ、誹謗を結縁として、彌陀念佛の法門に入らしめ
 たまへるの御方便なるもはかり知り難ければ、かれらの法流をき、
 ても、そしるまじき事なり、阿彌陀佛は、不和合のはづなり、法
 華坊主の修羅談義といふて、他宗を悪口して、法然親鸞も今は無間
 に居るならんごの、しるを、談義一座の肝要とするに、阿彌陀佛は
 第十八の本願に正法を誹謗するものは、除くあるゆへに和合せぬは
 ずなり、眞言なれば、法界體性智の大日如來、大圓鏡智の阿闍如來
 平等性智の寶生如來、妙觀察智の阿彌陀如來、成所作智の不空成就
 如來、この五智の如來を主として、胎藏界の四百七十尊八葉蓮臺十
 三大院塵刹の聖衆、金剛界の三十七尊九會曼陀羅の五百餘尊、この
 兩部金剛胎藏の界中に坐したまへる諸尊は、無始よりこのかた、一

切衆生の心中に歴然と住したまへるをさごりて、即身成佛するを宗
 意として、其相承するところは、此閻浮提にては、顯教の釋迦牟尼
 如來なり、けれども密嚴究竟の域にては、大日毘盧遮那と稱するよ
 り、金剛手これを傳持して、三世常住法界宮の中に、安住して、他
 に傳ざるを佛滅後六百年の時、龍猛菩薩と稱せし南天の龍樹大士、
 鐵塔に向ひて芥子を擲つけて、金剛の鍵關を啓き、金剛薩埵にあひ
 て、大日經金剛頂經蘇悉地經を寫つたへ、其のち龍智阿闍梨につた
 はり、次に金剛智阿闍梨不空三藏善無畏三藏一行禪師等と相承す、
 この不空三藏の惠果阿闍梨に傳へしを、日本の空海入唐してこれを
 傳法にあづかれり、今遍照金剛と稱する弘法大師これなり、其空海
 歸朝して、眞雅にさづけ、眞雅より禪仁にさづく、その禪仁に二子

ありて、一子の益信は、廣澤の祖となり、一子の聖寶は小野の祖なり、東寺の一派は、直に金智不空海眞然にいたるごいふ、衆生本來引字不生引字究竟一切字母よくこれを觀ずれば、周邊法界卷舒自在五相成身六大無碍談じて、釋迦顯教の法に同ぜず、灌頂は輪王の位を授く、五瓶の智水は鎮に澄り、九識自然に佛惠に入、父母所生身速證大覺位とたつる法門なるがゆへに、步船鈔にも眞言宗ごいふは、諸教の最頂秘密の上乗なり、諸宗はみな釋迦顯露の所説なり、いまだこの眞言教は、大日如來自受法樂内證の秘法なるがゆへに、淺行のごもがら受職灌頂の位にいたらずしては、深秘を傳ふるごことなし、傳ふる人も顯露にこれをこくごことなし、もしこれをこかば越三昧耶のごごいひて、重罪をまねくゆへに、みだりにこく事あた

はず、もごよりしらすつたへざらんごもがらにおいてをやご、存覺上人ねんごろに示したまへり、今諸宗諸法を誹謗するごこと、おほきなるあやまりなり、ごいましめたまへるごこと、誠に御慈悲の御教誠なりけれ。律宗なれば、毘尼藏の中の四分律五分律十誦律僧祇律等の戒行を修して、身をいましめ口をいましめ意をいましめ、五戒八戒十戒二百五十戒五百戒十無盡戒一切威儀戒等にて、非を防ぎ惡を止め、十重禁戒四十八輕戒光明金剛寶戒も、比丘比丘尼の行相にていづれも生死を出離せんごするの要行なり、貞元入藏錄の小乘經六百八十卷、小乘論六百九十五卷、小乘律四百四十一卷みな此宗の用物なり、然れごも戒ごいへば小乘なりごおもふべからず、布施持戒ごいふごきは、大乘菩薩の六度なり、これを大乘戒ごいふ也、常樂

三帖目 五百
臺主の歩船鈔には、戒にをきて、大小の差別なけれども、受者の心によりて大乘戒も小乘戒もいはるゝなりと、あるをもしらねばならぬ事なり。俱舍宗なれば、聲聞は四諦を觀じ、六十劫の修行にて、四向四果の阿羅漢なる緣覺は、十二因縁を觀じ、百劫の修行にて果を滿する菩薩は、六度を行じて三祇の大劫を経て、八相成道するむねを明せる俱舍論をもつて、宗の根本とするなり、其本論は天親菩薩の造たまひし三十卷にて、光の記寶の疏圓暉の頌疏もありて、斷惡修道の法門行學にも解學にも知らねばならぬ宗法なり、梵曆の開祖普門律師南紀にて曆象篇講釋の時、其國の大守の招によりて、昇殿の時定めて天文の事をき、たまへるならんとおもはれしに佛曆の事は一言もたづねたまはず、俱舍論のはじめ界品より、根品

世品業品隨眠品賢聖品逐一に指を折て、次第をかぞへたまひて、其所明の義理をたづねたまへる事、野山叡山の論義席にても、名目義理をかくまで闡記して、研究するものは多からざるべしとおもふはごにありしご、律師退きかへりてわれに其日の物語なりき、然れども、外道を破する破我品にては、仰せにはさふらへごも、それにては論意のつきざる事のさふらふご、おしかへしてこたへたてまつりければ、未聞の益を得たりと命ぜられしごぞ、此寸珍をよむにつけても、少年の僧たちは心得にもならんかとおもひて、傍論をかきつけたるなり、俱舍唯識の學問も、朝寢午睡の間だには假名がきの論泉鈔にても目さましにしたまへかし、何方へ招かれて、何人のたづねにあはんも知らず、恥を知らずの鐵面皮も赤面して、火ならば

あつき事なるべし。成實なれば、十八有學九無學の二十七、賢聖を
たて、小乗の空門を明すを宗意とす、これも步船鈔にては、この宗
は當時習學すでにたえたるが如し、いはむや修證の人さらにこれな
しと見ゆれども、日本にてふるき宗旨はこの三論宗なり、日本紀に
ある百濟國より曆書をもち來りし僧正觀勒も、宗旨は三論にて、中
將姫の戒師なりしといふ、當麻寺の實雅法師も三論宗なりしとぞ、
この宗意は俱舍とあなじく三乗の道位を明せども、俱舍とは明しか
たのまされる事もありて、三論玄義の因縁所生法我説即是空亦名爲
假名亦是中道義とあるにて知るべし、如律の修行者いへる事あり、
輪袈裟のしんに白紙またはわけもなき反古を入んより、三論玄義の
今の文を縫入れたらば、可ならんといへり、如法の行人は、それら

の事にも心あるをゆかしくおもひたりし。
禪宗なれば以心傳心の證悟に達するを宗意とじて、本來の面目をま
もりて見性成佛す、達磨大師九年面壁して工夫ありし法門なり、佛
在世の時、靈山會上にて百萬の大衆あつまりて、佛語心の大道を聽
法の座におゐて、大梵天王金色の波羅華を佛前に捧て、供養せらる
ゝに、釋迦如來その華をとりて、拈たまふに大衆いづれもそのおし
へをささる人なかりしに、迦葉尊者唯一人につこりこ口をひらきて
るみたまへり、これ破顔微笑といふなり、その時世尊その微笑せし
迦葉尊者に告たまはく、われに正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙解脱
の法門あり、今汝に附屬す、斷絶せしむることなかれと、飲光の迦
葉に佛金色の僧伽梨衣をもさづけたまへり、それより迦葉これを傳

持して、阿難に附屬して、自身は雞足山の石窟に入て、彌勒の出世をまちたまへるおもむき、大梵天王問佛決疑經の説にくわしく見えたり、これを以心傳心といふものなり、すなはち不立文字の法なれば、教外別傳にして、見性悟道すれば、即心即佛なりとす、天竺にての傳法達磨にいたるまでを、二十八祖として、その達磨は第二十七祖の般若多羅より傳へらるゝ時、その師の多羅尊者の遺言に、われ入滅の後六十餘年にいたらば、唐土にわたりて化益せよといへりかるがゆへに梁の武帝の時、唐土へわたり、慧可大師に附屬ありてそれより臨濟曹洞雲門等唐土の六祖五家七宗となれり、日本にては聖德太子に乞食のすがたにて達磨の相見をはじめこして、大安寺の行表建仁寺の榮西東福寺の聖一國師等和朝の傳法いまにいたるまで

さかんなることなり、禪天魔なごゝをしるべきわけなるものならんや、かるがゆへに誹謗すべからずと、今章にいましめたまはりしものなり。又諸宗ノ學者モ念佛者ヲバアナガチニ誹謗スベカラズ自宗他宗トモニソノトガノガレガタキョト道理必然セリとは、自他ごもに誠たまへるの文證は、自法愛染毀咎他人の智度論を引て、八宗の祖師龍樹菩薩の誠めなりと、諸宗にかふらしめたまへる事一帖目にあるが如し、今は道理必然として、理證をもつて誠めたまへるなり、その道理證とは、自宗より他宗を謗るがわるければ、他宗より自宗を謗るも悪しきなり、いづれも釋迦一佛の説經を、信受奉行する事なれば、たがひにそのごがのがれがたし、師の足二本を弟子二人して、一本づゝもみさすりて居て、兩人たがひにあらそひいかること

御文講話

ありて、一方よりその持たる師匠の足をもつて、相手の弟子をうち
 ければ、又一方の相手より師匠の足にて受止める、たがいに足にて
 たゞきあひ、師匠の足を打おりしといふが如く、ごちらも佛弟子佛
 法者經文にてうちかける、經文にてうけとめるほごけの御むねをい
 ためるのみ、そのごがのがれ難きこと道理必然にあらずや。
 四ニハ守護地頭ニナイテハカギリアル年貢所當チチンゴロニ沙汰シ
 ソノホカ仁義ヲモテ本トスベシとは、上の章にも、守護地頭方にむ
 きても、疎略なく公事を全すべしとも。國にあらば守護方處にあら
 ば地頭方におゐて、疎略の義ゆめくあるべからず、公事を專にす
 べしとありて、これは當流にさだむるところの掟なり、ごあれば天
 職たる太守ありて、治まれる外護の國法にそむかず、地頭ありて當

御文講話

おかる、年々の貢を具さにはかれとなり、代官庄官をもかろしむ
 べからざるは、當宗の常談なり、私用はかたはらにして、公事公用
 は專にすべし、記事珠には年貢所當に、盛衰記の三十三と四十六と
 を引てあるは、博識なること也。仁義ヲ本トせよとある事、これま
 た當流の掟なるものなり、文王の代の仁徳も今の治世にて知るべし
 其樂を樂みて、其利を利とし、諸民おのゝ其職をなし、其利を得
 ては、親子夫婦睦まじくよろこびたのしみくらすことまことに有難
 き御世にあらずや、これを示めすを法談の常として、一流の掟をか
 たる事、これ又佛法の有難きところならずや、儒者には此心得悪し
 きもありて、近來大阪の儒者の出したる草茅危言といふ書物には、
 今の御政よからぬやうにおもひ、道あらず、至らずといはぬばかり

の書かたにて、我もし政を執ならば改革したき事あまたありごおもひあまりて、筆をとりたるおもむきなり、ごかく治世の吉例をむかしの例に直したきむねに見ゆる事あり、よろしからぬ事なり、おのれいやしき身たりながら自賢なりごおもふに似たり、今の世何のたらざるありて、危言を筆したるものぞや、先年大陂の町々に、火をはなちて鐵砲にて、天満船場上町を焼あるきたるものあり、其ものは儒學の達人なりご名のありしを用ひられざりしを、うらみたるよしにて、徒黨してその連名を書つけたる車を引て、火をつけあるきたるごぞ、天満の六丁目の番人なるもの、亂放なるを知らず、常の火事なりごおもひて、町内の喚鐘をうたんごあはて走りて梯に馳け登る、其黨類ごもおかしがりて其持合せたる鐵砲にて打ころせば、

さかさまに高き梯より落けるを儒學達せりごいふ、其日の大將ごもにこれを見あげて、にこ〜〜笑ひ居たりご、にげはしるもの、見たりけるをうはさせし事あり、儒者か仁者か知らねごも、佛法中のものなればかゝる罪もなきものを、たはふれの如くにころして、にこ〜〜笑ふて居るものはあるまじ、惻隱の心なきは人に非ずごも、惻隱の心は仁の端也ごもいへる事も、仁義あるがゆへに人倫の道ある事も、あくまで知りながら、其儒者の不仁なるごごいふべきもなきごごにて、かれがために家焼けて、假小屋にて病人死人ごなりたるものそのかず若干ならん、佛者にかゝる不仁者のありし事をさかす、仁義をもつて本ごすべきものなりの教訓あまねくゆきごごきぬるがゆへならずや、佛法ます〜繁昌して、治平の萬々世なるご目

出たかりける。

五ニハ國ノ佛法ノ次第當流ノ正義ニアラザルアヒダカツハ邪見ニミ
エタリとは、この一通は奥に文明七年七月十五日とあれば、文明三
年より同七年八月まで吉崎にて、御勸化の終りの比なれば、國の佛
法の次第とあるは、越前の國なり、この前年の一通に、夫越前の國
にひろまるころの秘事法門といへることは、さらに佛法にてはな
し、淺間しき外道の法也、これを信ずるものはながく無間地獄にし
づむべき業にて、いたづらごと也、この秘事をなほも執心して、簡
要と思ひて、ひそをへつらひたらさん者には、あひかまへてく隨
逐すべからず、いそぎその秘事をいはん人の手をはなれて、はやく
さづくるころの秘事を、ありのまゝに懺悔して、ひそにかたりあ

御 文 講 話

御 文 講 話

らはすべきなのなりとありて、文明六年七月五日の事なれば、これ
をさして國の佛法の次第、非義たるあいだ、正義におもむくべき事
を示めさせられたるものなり。かつは邪見にみえたりとあるも、佛
法にてはなし、外道の法なり、無間地獄にしづむべき業とあれば、
五逆謗法に一例する悪法義なれば、邪見にみえたることはさもさふ
ず、さもありたるならん、かるがゆへにその悪心をひるがへして、
善心におもむけと勸誡したまひたるものなり、不正義のかたを悪心
とし、正義の方を善心とたまへるは、行者の悪自力の心にてはた
すからず、如來の他力の善心にてたすかるとある、善心悪心の事な
り、中古以來の章に、日ごろの悪心をひるがへして、善心になりか
へる人もあるべしとのたまへるに同じ。六ニハ當流眞實ノ念佛者ト

イフハごは、下に示めたまへる相傳もなきしらぬるせ法門に對して、當流眞實の念佛者ごのたまひしものなり。夫一流ノ安心ノ正義ノチモムキトイフハごあるより以下は御文相のまゝをよみて有難くいたゞくべし、一念無疑の信心の一途なり、願力ご強縁ごは、弘誓の強縁ごものたまへる勝縁の事にて、尊號銘文の護念、増上縁の御釋に、天魔鬼神にもやぶられぬ、つよきちからの縁力を明して、増上縁はすぐれたる強縁なりごありて、善導大師の玄義分の正由託佛願以作強縁これなり、エセ法門の事は、非義たる不正の安心の事はきこゆれごも、エセごいふことばのことは記事珠のいふが如く和語燈錄の一にある、我等ごごきのエセ物ごもの一念十念、同七にある十方三世の佛菩薩にもすてられたるエセ物をたすけんごて、曾我

物語の十郎祐成がうちをりたる太刀のことを、これほごのエセ太刀をもちてご。又わごのはいつくを見て、それをエセ太刀ごはまふすごあるをみなひらひ出せり、いづれクセ法門ヒガ法門ごいふも、古日本のごごばごみえたり、次下の章にも、知らぬエセ法門をいひて自他の門徒中を經廻して、虚言をかまへご、四帖目の詠歌の章にもかたはらいたくも、かくの如く知らぬエセ法門をまうすごご、かつは斟酌をもちかへりみずご、又相承もせざる知らぬエセ法門をもて、人にかたり等ごある所みな、エシレヌ法門ごいふごゝろの古語ご見へたり。

第十一通

每年不闕之章

抑今月廿八日ハ開山聖人御正忌トシテ毎年不闕ニカノ知恩報徳ノ御

佛事とは、大谷破却のち花洛を退出ありて、大津三井寺の南別所より、同國堅田邊越前吉崎の居住都合十ヶ年あまりの事なれども、報恩講は闕たる事なく、いづかたにありても御執行ありし事なり。アラユル國郡ソノホカイカナル卑劣ノトモガラマデモは、日本六十餘州六百餘郡一天四海にみちくたる祖師の御門徒の御恩をおもひて、報恩講をいこなむ事なり、三國佛祖傳の善信親鸞の遺弟門葉市をなす、遠忌をむかへては報謝する事、不思議なりとかかきたれば今にはじめぬ宗教の繁昌にて、比類なき聖人の勸化といふものこれなり。ソノ御恩ヲシラザルモノハマコトニ木石ニコトナランモノカこは、有情たるものにてありながら、非情無心の木石ごことなるかここならぬかを、おもひはかれこの教示の御深切なり、木石無佛性

によせていふなれば、御恩知らずは、木石にここならぬ信心なしの無佛性ものなり。コレニツイテ愚老コノ四五ヶ年ノアヒダハナニトナク北陸ノ山海ノカタホトリニ居住ストイヘドモこは、北陸道のうち、越前の吉崎は、御堂は山上にて山の麓は大海なり、かるがゆへに文明三年より同七年までの吉崎居住をのたまひしなり、ハカラザルニイマニ存命セシメコノ當國ニコエハジメテ今年聖人御正忌ノ報恩講ニアヒタテマツル條マコトニモテ不可思議ノ宿縁ヨロコビテモナチヨロコブベキモノカこは、越前より河内國出口へうつりたまひて、はじめの報恩講の御執行なり。ダトヒ牛盗人トハヨバルトモ佛法者後世者トミユルヤウニ振舞ベカラズこは、二帖目にていふが如し。仁義禮智信こは、改邪鈔に出世法におゐて、五戒と稱し、世

御 文 講 話

法にありては五常と名づくる、仁義禮智信を守りて内心には、他力
 不思議を持べきよし、師資相承することある、これなり、然れども、
 今五戒を云ずして、五常の方をもつて示めたまへるは、五常は儒
 道の人道を教ふることはなるがゆへに、五善五惡を説く大經を、釋
 迦如來の時より人道經の名あるが如く、道ある人間に生ずるとき上
 にはあはれむ佛あり、下にしたがつ衆生ありと、禽獸にこそなりて、
 敬上慈下をわきまふる人間にて、度世上天泥洹之道の佛果までもの
 ぼる事なり、此五常を學ぶときは、天下國家の治りて、君臣父子夫婦
 兄弟朋友五倫正くして、四海安穩なり、世として國としてなくんば
 あるべからざるのみならず、佛道は心法の理教なれども、此人道に
 て行ずるの法なれば、本山の寺法として、王法仁義の示しある事、

御 文 講 話

たゞに世間にじゆんずるの沙汰のみにあらず、かならず國をへつら
 いての掟なりとする事なけれ。相傳モセザル聖教チワが身ノ字チカ
 ラチモテコレチヨミテシラヌエセ法門ナイヒテ自他ノ門徒中ヲ經過
 スルとは、その時代は今のやうに法談する事なく、聖教をよむばか
 りにて、門徒を勸化せしものなり、美濃の國不破郡安八郡にある廿
 五日講といふ組合の法中に、法談をしかもありがたく自信教人する
 こともがらもありけれども、毎年毎月の講會にむかしより今にいたる
 まで、草道島村西圓寺の法談と定まりありて、他僧はつるに法談し
 たる事なし、たま／＼西圓寺さし合ありて伴僧の代參なるときは、
 組合の内たれなりとも法談しけるに、參集の尼女房は、西圓さまの
 御法談はかたすぎる、廓然さまのがわれらの耳へはよくきこへる、

徳圓さまのが有難い、正圓さまのがやすらかなご、おもひく〜にうはさして西圓寺さまのさしつかへる日が、参詣人のよろこび也といひけるを、西圓の院主寶嚴寮司へもれきこへて、尤至極の事なり、元來此方は二十五日講の組寺にはあらざれども、むかしは法談する坊主のなかりしゆへ、先代へ法談をたのめるゆへ、しからは此方は蓮如上人の格別なる御舊跡にて、祖師蓮師御蓮座の御影安置にて、如信上人より乗如上人までも、みなく〜兩御代ツ、二尊連座の御影なる由緒は知れる事なれば、毎年正月二十五日の初講は、くじごらずに西圓寺と定めて、二十五日講法中参詣にて、二月以下を闡ごりして寺々につごめられ候はゞ、毎月法談にゆくべしと規定せしむね記録に明白なれば、むかしはむかし今は今、當時はみなく〜法談も

達者なれば、われら如きの咄辯は、此方よりいごま狀にても、らひたきものなりご、にこ〜ご笑ひがほなりし事あり、これをもつておもへば、むかしにありてはよく〜法談は大事の物ご心得ていやがりしものごみえたり、むかしの老僧の詠歌ごて、樂そうに見へても長い三部經、ねむたい朝時いやな法談ご、今に人口にのこるは、あやまちてはならぬものごつゝ、しみたる、むかしの正直律義なりし事も尊し、今世の僧たちにうたよみたまへごいはゞ、かくなんよめるならんか、人はしらずわれまづ同詠せば、長ふても布施のされるは三部經朝時は隨意法談は錢、サテ古代の事は夏の御文の中に、今日ノ聖教ヲ聽聞、聖教ヲヨミ候、聖教ノ勘文ヲエラビヨミマウシ候毎日ノ聖教、耳ヲカニ聖教、聖教ヲヨミ候ハンモイマ三十日等ご數

三帖目 五百二十
 言あり。御一代聞書ニ曰、信心ヲヨク決定シテソノウヘニテ聖教ヲ
 ヨミカタラバキクヒトモ信ヲトルベシ。又曰聖教ハヨミテガヘモア
 リコ、ロエモユカヌトコロモアリ御文ハヨミテガヘモアルマジキト
 オホセラレサフラフ。聖教ヲバヨメドモ眞實ニヨミモセズ法義モナ
 キハ聖教ヨミノ聖教ヨマスナリ。聖教ヲヨメドモ名聞ガサキニダテ
 テ心ニハ法ナキ故ニ人ノ信用ナキ也。坊主ノ聖教ヲヨマレルナキ、
 テ聖教ハ殊勝ナレドモ信ガ御入ナキアイダタフトクモナク候。聖教
 ヨミトテシカモ我ハト思ハン人ノ佛法ナイヒタテタルコトナシゴ。
 次ノ御文ニ曰諸方ノ門徒中ヲ經廻シテ聖教ヲヨミアマサヘワタクシ
 ノ義ヲモテ本寺ヨリノツカヒト號シテ人ヲヘツラヒ虚言ヲカマヘモ
 ノナトルバカリナリコレラノヒトヲバナニトシテヨキ佛法者マタ聖

教ヨミトハイフベキチヤミこれらにて、今世の法談僧トイフモノナ
 る。むかしは聖教ヨミゴいふたるおもむき古風なる事なり、記事珠にも
 慧空も慧燈もこのあたりの考は、同説なりといへり、示珠指にはこ
 れらの沙汰は略せり。本寺ヨリノ成敗ト號シテ人ヲダブロカシ物ヲ
 トルゴは、その時代にはかゝる悪行のものもありしならん、しかし
 帖外の御文にては、大坊主分の輩は、俗人に問答するにも、大坊主
 のこたへに、一卷の聖教をも所持せず、淺間しき身なりと、俗人に
 對して、貴方は俗人の身ながら、かゝる殊勝の事を申され候ものか
 な、ワレ等ハ大坊主分にては候へども、いまさら淺間しくこそ存じ
 候へこ、あやまりている様子なれば、所持せぬ聖教をよむべきなら
 ねば、この本寺よりの成敗さて、物をこりしものは、今世にも大坊

主をもあやまらせる俗人あるを、大坊主も小坊主もいやがりて、一句を吐て大根もくさらぬうちに、引がよしといひけるのたぐひなりしものか、示珠指には誑惑なり、瑕瑾なりといふて、眞實く淺間しき次第にあらずやの文言を釋せり、いかにもよしとすべし。今月二十八日ノ御正忌とある以下の御示しは、よみたるまゝにて有難く信知すべし。オヒテコソ○アルベケレとは和讃の御てにはニ信心ノ智慧ニイリテコソ佛恩報ズル身トハナレとあるに同じ。

第十二通 聞取法門之章

抑イニシへ近年コノコロノアヒタニ諸國在々所々ニテ隨分佛法者ト號シテ法門ヲ讚嘆シ勸化ナイタストモガラノナカニオヒテサラニ眞實ニワガコ、口當流ノ正義ニモトヅカズトオボユル也とは、中

古已來トモ中古コノゴロトモあるに同じく、當流ノ法義ニ正不ノ分明ナラザリシハ、或ハ鎮西或ハ西山ノ安心ニ混入シ、或ハアマタ御流ニソムキ候、本尊以下御風呂ノタビコトニヤカセラレ候トアルノタグヒモいにしへの不正にてありたるならん。勸化ナイタストモガラとは、聖教ばかりにてもなく、法談もありたる事にて、御法談のごき光明遍照十方世界の文のこゝろと、又月かげのいたらぬさはなけれども、ながむる人のこゝろにぞすむとあるうたをひきよせ、御法談さふらふとも、又法慶坊の讚嘆に、言南無者の釋文にいつもはづさぬをほめたまへるが如く、法談もその辨じかたは、今の法談にひこしかりたるならん、われは佛法の根源をよくしりがほの體にて、しかもたれに相傳したる分もなくして、あるひは椽のはし障子

のそこにて、たゞ自然さき、さり法門の分際をもつて、眞實に佛法にそのころさしはあさくして、われよりほかは佛法の次第を、存知たるものなきやうにおもひはんべり、これによりて、たま／＼も當流の正義をかたの如く、讚嘆せしむるひをみては、あながちにこれを偏執すごあるは、しかも今の世にひさしかりし事也しごみるたり。宿善無宿善ノ機ヲ沙汰スベシとは、この御代の御勸化には、殊更に此御用心ある事にて、中古已來の章にも、佛法聽聞のためにさて、人數おほくあつまりたらんごきも、この人數のなかにおゐてもし無宿善の機やあるらんごおもひて、一流眞實の法義を沙汰すべからずごあるの御用心、今時にごりては、あまり／＼御用心すぎるほごにもおもひたてまつる、今時人數おほく、本山の御堂にても末

寺の法會にても、數千人の參詣ある時に、此人數の中におゐて無宿善のものあらんやさて、一流眞實の法義を沙汰せざる時は、御堂衆の法談も安心なしの法談をするものか、それでは一座の肝要拜讀の御文といふて、一流眞實の御勸章はよみがたき道理なり。實悟記の中に報恩講のここ逮夜すぎ候へば、人をここ／＼く出され、御影堂に一人も人なきやうになりて、のぞみの人五十人三十人残り候ふやうに見え候、人多き時は、御堂衆坊主衆手蠟燭をさぼし持て、人を出され候て、門をばたて候、御影前には五十人三十人にて、第一坊主衆改悔にて、次にそのほかの人一人ツ、前へ出られ、坊主衆の中をわけられおかれて、前にす、み諸人改悔候ごあり、今ごき此ていならば、外よりは秘事法門ならんごいふなんめり、これ他なし其時

代にありては、あながちに偏執すべき耳をそばだて、謗難のくちび
るをめぐらすをもて本とする時分たるあいだ、かたくその用捨ある
べきものなりの御用心なり、他流の人に對してかくの如く沙汰ある
べからず、他宗他人に對してこの信心のやうを沙汰すべからずも同
じことなり。無宿善ノ機ノマヘニナヒテ正雜二行ノ沙汰ヲスルトキ
ハカヘリテ誹謗ノモトヒトナルベキナリとは、當流一途の所談なる
正雜二行の判釋は、他流の人はゆめにも知らぬ事ゆへに、誹謗の罪
人とならん事をおそれて、沙汰を誡めたまへるなり、その分別のお
もむきあらまはしはこゝろえおくべし、まづ他流の淨土宗にては、正
行とは專修の事、雜行とは雜修の事とのみ談ずるなり、その末流の
輩、當流の正雜二行の祖判をきかば、あやしみて誹謗罪に墮せんこ

ご必せり、ソモく當流聖人のひらきたまへる淨土眞宗の正行雜行
の御分別は、狗打小僧も田疇百姓も耳にはたごひたもたずとも、一
應は聞てをくべし、顯化身土文類の祖判に、雜行雜修其言一にして
其意惟異なり、雜の言に於て萬行を攝入す、五種の正行に對して五
種の雜行あり、雜の言は人天菩薩等の解行雜が故に雜と曰、本より
往生の因種に非ず、廻心廻向之善なり、故に淨土之雜行と曰也、復
雜行に就て專行あり專心あり、復雜行あり雜心あり、專行者專一善
を修するが故に專行と曰、專心者廻向を專にす故に專心と曰、雜行
雜心者諸善兼行す、故に雜行と曰、定散の心雜が故に雜心と曰也、
亦正助に就て專修あり雜修あり、此雜修に就て專心あり雜修あり、
專修に就て二種あり、一者唯稱佛名二者五專あり、此行業に就て專

心あり、雑心あり、五尊者一に専禮二に專讀三に專觀四に專名五に
 專讚嘆是を五專修と名く、專修其言一而其意惟異なり、即是定專修
 復散專修なり、專心者五正行を專にして、二心なきが故に專心と曰
 即是定專心復是散專心也、雜修者助正兼行の故に雜修と曰、雜心者定
 散心雜が故に雜心と曰也、應に知べし、凡淨土一切諸行に於て、緯
 和尚は萬行と云、導和尚は雜行と稱す、感禪師は諸行と云、信和尚
 は感師に依、空聖人は導和尚に依也、經家に據て師釋を披に、雜行
 の中の雜行雜心雜行專心專行雜心、亦正行の中の專修專心專修雜心
 雜修雜心此皆邊地胎宮懈慢界の業因なり、故に極樂に生ずと雖ども
 三寶を不見佛心の光明餘の雜業の行者を照攝せざる也、假令之誓願
 良に有由哉、假門之教忻慕之釋是彌明なりと。これが當流の正雜

二行の沙汰にて、次上の御文には、凡一代の教に就て此界の中に於
 て、入聖得果するを聖道門と名づけ、難行道と云、此門の中に就て
 大小漸頓一乘二乘三乘權實顯密堅出堅超あり、即是自力利他教化地
 方便權門之道路也、安養淨刹に於て入聖證果するを淨土門と名づけ
 易行道と云、此門の中に就て、横出横超假真漸頓助正雜行雜修專修
 あり、正者五種の正行也、助者名號を除て已外の四種是也、雜行者
 正助を除て已外悉く雜行と名く、此乃横出漸教定散三福三輩九品自
 力假門也。横超者本願を憶念して、自力之心を離る。專修者唯佛名
 を稱念して、自力之心を離る、是を横超他力と名づくる也。斯即專
 之中專頓中之頓眞中之眞乘中之一乘斯乃眞宗也、已に眞實行之中に
 顯し畢ぬと述させられたるが、正雜二行の分別といふものなり、別

三 帖 目
五百三十
して唯稱佛名の分別につきては、弘願眞宗の妙談、おそらくは彌陀の直説といふべき教行信證の祖判は、強會不可會の辨佞にて、明慧の選擇を破されたる邪集の邪義のご、摧邪輪の口まねして御本書にあたりてみても、その破のあたらざる事闇のつぶてぞおかしかりける、又門徒同行の尼入の輩、御開山の御苦勞といへば、石を枕に雪の床、御煙草ごてもあらざれば、蔦や木の葉のなたきざみ、角なき石に丸火打、蓮位一ぶくせまいかご仰られたふるひごゑのなき法談になみだこぼすぐらいの知恩報徳ではたらぬぞく、專雜の得失報化の辨立、唯稱佛名の淨土眞宗に歸せしめたまひたる御出世の御恩こそほねをくだきても謝すべきことなれ。大經ニ云若人無善本不得聞此經ごは、このごころ略して宿善をのべさせられたるより、具さ

に宿善をいふごきは、諸善萬行の宿善は、第十九の願功にて、清淨有戒者乃獲門正法ごなり、自力念佛の宿善は、第二十の願功にて、若人無善本不得聞此經の義たる事ごもしげきがゆへに、略して宿善の機を示めしたまへるごうかゞひける、次の定善義の過去已曾の文は、諸行も念佛も、定散自力の行業は、みな修習此法の中なる物ご知るべし、その餘の御文相はよみてありがたくいたゞくべし。

第十三通 門徒心得之章

夫當流門徒中ニテヒテステニ安心決定セシメタラン人ノ身ノウヘニモマタ未決定ノ人ノ安心ナトラントオモハン人モコ、ロウベキ次第ハごは、信決の門徒ご未決の門徒ご、そのわかちはあれごも、こゝろへの次第はかはりある事なし、宗風の一相なるむねを示したまへ

御 文 講 話

るなり、その次第は王法より仁義までの輕賤誹謗疎略等の誠めよみて知るべし、これは信不信にかゝはらず、たゞへば鳩毒の如きは、病人も無病人も毒とするが如く、右の次第は總じて門徒の心得をのべたまへり。後生ノタメニハ内心ニ阿彌陀如來ヲ一心一向ニタノミタテマツリテ自餘ノ雜行雜善ニコ、ロチハトメズシテは、酒肉は病人によりて別に毒とするが如く、雜行雜善にこゝろをこめぬは、他力信者は念想なり、すなはち一念多念證文に、一向は餘の善にうつらず、餘の佛を念ぜずあるこれなり。一念モ疑心ナク信シマイラセバカナラズ眞實ノ極樂淨土ニ往生スベシとは、眞宗念佛きえつ、一念無疑なるをこそある、聞信一念の安心なり。ワレラゴトキノアサマシキ一生造惡ノツミフカキ身ナガラこは、信機の釋

御 文 講 話

相也。ヒトタビ一念歸命ノ信心ヲオコセバ佛ノ願力ニヨリテタヤスクタスケタマヘルこは、信法の釋相也。彌陀如來ノ不思議ニマシマス超世ノ本願ノ強緣ノアリガタサヨトフカクオモヒタテマツリテこは、末燈鈔は如來の誓願は、不可思議にましますゆへに、佛に佛の御はからひなり、凡夫のはからひにあらず、補處の彌勒菩薩をはじめとして、佛智の不思議をはからふべきひこはさふらはずとも、一念發起のとき無碍の心光に攝護せられまひらせさふらふゆへに、つねに淨土の業因決定すこおほせられ候、これめでたくさふらふ、かくめでたくはおほせさふらへども、これみなわたくしの御はからひになりぬこおほへさふらふ、たゞ不思議に信ぜさせたまひさふらひぬるうへは、わづらはしきはからひあるべからずさふらふとも示

したまへるにて照し合せて自督の領解さすべし、われ少年十三歳の時、福田村眞光寺にて、此聖教を拜して、一筋に佛智不思議をたのみ身の、おもひはからふことゝてはなし、片假名にてかきつけおきたるを、夏藤六十年の、ちに、おもひいだすに、うたはこしをれにておかしけれども、安心の一筋なる事は、こしのをれざるよろこびて、近頃法話にかたりければ、洛陽聞信講の内なる薬屋九兵衛の所望にて、老筆をふるひてあたへけるを表具して、床にかけられたり佛智をあがめての事なれば、ともに有難くぞありける。

五帖
一部
御文章講話

五帖御文講話

第四帖目

一名御文寸珍

御文講話

四帖目初通

遇獲信心之章

夫眞宗念佛行者ノナカニテ法義ニツイテソノコ、ロエナキ次第
 コレオホシゴハ、法義のころえには、信のうへよりは善きことは
 人にも傳へ、悪しき事は人にもかたらず、善には近づき悪には遠ざ
 かるものなり。天親菩薩の論の類にも、信は疑にひるがへる善を
 ねがふを業とすこあるこれなり。シカルアヒダ大概ソノチモムキチ
 アラハシチハリヌゴハ、概は斗かけとも升かけともいふ字にて、な
 らす事なり、それをきめこまかにせず、大むねならしていふを、
 大概といふなり、世間にてあたましなるを、大概にしておくとい

御 文 講 話

ふこれなり、今も信者のこゝろへをかきならへは、今こゝに見へてある王法仁義諸神諸佛諸法諸宗自信教人宿善無宿善等の分別のみにあらで、人身受け難きをおもひ、佛法あひがたきを知る等、あまたなるを大概示めしたまへるこの事なり。所詮自今已後ハ同心ノ行者ハコノコトバチモテ本トスベシゴハ、所詮ごころは、自今已後は教主の御こゝろに同じ、眞宗の念佛者はいづれもこの御こゝばをもつて、本道なりご知るべしごある御教示なり。コレニツイテフタツノコ、ロアリニハ自身ノ往生スベキ安心ヲマツ治定スヘシゴハ、一帖目の初通にある一流の安心を知らぬ大坊主、又佛法の次第もてのほか相違したる念佛者の坊主達、四帖目の六通にある、いさゝかも相承もせざる知らぬるせ法門をもつて、人にかたる坊主の身上、又

御 文 講 話

坊主分の人にかぎりて、信心のすがた一向無沙汰なりの身しらず、又我信心はきはめて不足なる、佛法の棟梁たる坊主達、二帖目の十二通にある一心決定の分もなく、一卷の聖教もまなきにあてず、一句法門の勸化もせず、まくらをこもごする寝坊主、又言語道断ごしかられる大酒のみの酔狂坊、これらの輩御在世にあまたありて、自行教他の本意を知らしめたまはりたる御示めしなるべし、此中にてもしらぬるせ法門をいひて、人をもまごはし、もつてのほか相違したる事をすゝむるより、酒のみて寝てばかり暮す坊主が、牛になりても荷物はかるきかたならんか、今世にはわけて御冥見にはづれ、車牛ごもなるべき達者もあらんか、今筆をもち字を書くも、おそれみく手ふるふ事なり。二ニハヒトヲ勸化センニ宿善無宿善ノフ

四帖目 五百三十八
 タツチ分別シテ勸化ナイタスベシとは、中古已來の章に、佛法聽聞のためにて、人數おほくあつまりたらんときも、この人數のなかにおいて、もし無宿善の機やあるらんと思ひて、一流眞實の法義を沙汰すべからざるころに、近來人々の勸化する體たらくを見およぶに、この覺悟はなく、たゞいづれの機なりとも、よく勸化せばなごか當流の安心にもごづかさらんやうにおもひはんべりき、これあやまりごしるべしと、あるにひこし、そのほかのしめしつねにこの掟ある事なり、いにしへ大谷にて、覺如上人と唯善御房と、南殿北殿に舅甥の両方居住のとき、この事に諍論ありて、覺師は宿善開發の機善知識にあふて、信心歡喜して報土往生するといへるに、唯善大徳は宿善の有無を沙汰せず佛願にあへば、往生をうるこそ、

不思議の大願なれといへる、覺師かさねて大經の若人無善本不得聞此經宿世見諸佛樂聽如是教等の十二句を引て、無宿善のものは憍慢弊懈怠にして、此法は信じがたしとあるむねを、善導の釋文をもならへあはせていへるを、唯善公より又それをうちけして、さては念佛往生にてはなくて、宿善往生といふべしやとあらそへるを、又覺如上人よりは宿善のゆへに知識にあふて、聞其名號信心歡喜するといふなれど、たがひにあらそひて、たがひに言説のやみけるを後のとき伊勢入道行願へつたへきとて、北殿覺師の法文は經釋をはなれず、道理のさすところ言語絶しぬ、南殿唯善の義勢は入道法文なりとてあざわらひけりこ、存覺の慕歸繪詞にありて、蓮如上人四十一才の傳寫なれば、五帖の中の御示めしみな覺如上人を、その

四帖目 五百四十

まゝの相承なりと知るべし。ワガ往生ノ一段ニテハ内心ニフカク一念發起ノ信心ヲタクハテ他力佛恩の稱名ヲタシナミとは、内心の一念は、信鉢口業の稱名は、信相にて、心行ともに得せしめたまひたる他力佛恩のしからしめたまへる者なり。タシナミとは、嗜の字にて、字書には欲なり好なりとありて、飲食を嗜甘酒を嗜のこいふて、酒ずきの酒をよろこび愛し好ころの字なれば、信心歡喜のすがたなりと知るべし、御一代聞書の中にはおりくある、御こさばにて、佛恩を嗜と仰候事、世間の物を嗜なごといふやうなることにてはなし、信のうへにたふさくありがたく存じよろこび申透間に、懈怠申時かゝる廣大の御恩をわすれ申ことこのあさましさよご、佛智にたちかへりてありがたやたふさごやおもへば、御もよほしよ

り念佛を申すなり嗜とはこれなる由の義に候、ごあるにて心得べしそのほか、佛法は一日くにしたしなみ候べしごも、世間佛法ごもに心にかけたしなみたき事なり、ごもひとたび佛法をたしなみさふらふ人は、おほやうなれごもおごろきやすきなりごも、佛法はわかきごきたしなめ、ごしよれば行歩もかなはずねぶたくもあるなり、たゞわかきごきたしなめごも、みな御一代聞書にある事也。ソノウヘニハ王法ヲサキトシ仁義ヲ本トスベシとは、掟の章にて聽聞すべしマタ諸佛菩薩等を疎略ニセス諸法諸宗ヲ輕賤セスとは、神明三ヶ條六ヶ條等にて聽聞すべし。世間通途ノ義ニ順シテ外相ニ當流法義ノスガタヲ他宗他門ノヒトニミザセルヲモテ當流聖人ノオキテマモル眞宗念佛ノ行者トイヒツヘシとは、牛盜人の章にて、聽聞すべし

コトニ當時コノゴロハアナガチニ偏執スベキ耳ヲソバダテ謗難ノク
 ナビルヲメグラステモテ本トスル時分タルアヒダカタク其用捨アル
 ベキモノナリコトは、ひろくいへば、五濁増のこさいたり、疑謗のこ
 もがらおほくして、修するをみてはあだをなす、念佛信ずるひこそを
 みて、疑謗破滅さかりなり、背正歸邪まさるゆへ、横にあだをぞお
 こしける、念佛の信者を疑謗して、破壊瞋毒さかりなりの時代、近
 くいへば無宿善の機のみへにおひて、正雜二行の沙汰をするときは
 かへりて誹謗のこひこなる、當流の正義を讚嘆するひこそをみては
 あながちに是を偏執するのたぐひを用捨すべしとなり、用捨はこれ
 を用ひこれを捨るこいふ事にて、いふてよきをもちひ、云てあしきを
 捨るこゝろにて、つねにいふ用心する事なり。當流ニタツルトコロ

ノ他力ノ三信トイフハ第十八ノ願ニ至心信樂欲生我國トイヘリコレ
 スナハチ三信トハイヘドモタ、彌陀ヲタノムトコロノ行者歸命ノ一
 心ナリコトは、御開山聖人八十三歳、建長三年乙卯六月二日に書たま
 ひし尊號眞像銘文の本の巻には、至心は眞實こまふすなり、眞實こ
 まふすは如來の御ちかひの眞實なるを至心こまふすなり、煩惱具足
 の衆生はもこより眞實の心なし、濁悪邪見のゆへなり、信樂こいふ
 は如來の本願眞實にましますをふたごゝろなくふかく信じてうたが
 はざれば信樂こまふすなり、この至心信樂はすなはち十方の衆生を
 して、わが眞實なる誓願を信樂すべしとす、めたまへる御ちかひの
 至心信樂なり、凡夫自力のこゝろにはあらず、欲生我國こいふは他
 力の至心信樂をもて、安樂淨土にむまれんこおもへこなりとあるが

本願の三信をやはらげての御示めしなり。同じ末の卷には、歸命は釋迦彌陀の二尊の勅命にしたがひめしにかなふさまふすことばなり。ごあるが、行者歸命の一心なり、三信には文字のかずは六あれども心の字は唯一字にて、その一字の心の字は、凡夫自力のころにはあらず、如來清淨本願の智心なり、かるがゆへに欲生は信樂に入、信樂は至心に入りて、三信すなはち一心なり、その一心が一念歸命の信心なるがゆへに、行者歸命の一心なりと示めしたまへるころなり。宿善開發ノ行者一念彌陀ニ歸命セントオモフコ、ロノ一念ヲコルキサミ佛ノ心光カノ一念歸命ノ行者ヲ攝取シタマフソノ時節ヲサシテ至心信樂欲生ノ三信トモイヒコは、記事珠に曰ころ、慧空にこそなへるこそありがたけれ、その解に云く、歸命せんごおもふ

位は、いまだ既に得たりごはきこえず、然らば攝取にはあづかるべからず、如何、謂歸命せんご思ふは、はや佛願に趣向しけるなり、向滿生熟分の起盡終に是一位なり、得終る後をまたず、發起の一念に光益にあづかることをあらはさんがためなり、即運心の功を借ざるの意なりご筆せり、いかにもく、勸主の御正意を得たるものごいふべし。示珠指はこのころは、無眼人無耳人のまねをして、見ぬふり聞ぬかほしてごほりぬけたることおかしかりけれ、示珠指の安心は一部通貫して、一念歸命は意業運心にきこゆるなり、その目その耳には、このころの歸命せんごおもふ因等起に、心光攝取は佛の御手まわしがちこくはやすぎるやうにも、おもひたるならんか小娘のたはふれあそぶにも、郭公なかせずにごる歌がるたご、

目ばやきものもあるなれば、念佛の衆生をみそなはしての攝取に、その機をよくしろしめす御手ぎはの運心作意をまちたまはざるは勿論の御事なりと尊信すべし。マタコノコ、ロチ願成就ノ文ニハ即得往生住不退轉トトケリアルヒハコノクラ井チスナハチ眞實信心ノ行人トモ宿因深厚ノ行者トモ平生業成ノ人トモイフベシとは、即得不退位は、信心の行人宿因の行者、これすなはち業成の人なりとつらねたまひたるなり。サレバ彌陀ニ歸命ストイフモ信心獲得ストイフモ宿善ニアラズトイフコトナシとは、上件のむねを結びたまふ、唯善房の諍論にあはせて見るべし。遇獲信心遠慶宿縁ハ文類聚鈔の文にて、たましく信心を獲ばこそ宿縁をよろこべといふ事なり、宿縁宿善宿因等みなむかしの過去已曾修習之法の事なり。荒涼ニ讚嘆

セシムルアヒダ眞宗ノ正意スタレタリとは、荒たる野ずへの人もなきところにて、ものいふ如くに、遠慮もなく口ひろくかたるなご誠めたまへるなり、そのほかは文のまゝ讀てよろこぶべし。

第二通 人間壽命之章

夫人間ノ壽命チカヅフレバイマノトキノ定命ハ五十六歳ナリとは、天地の間も年々にたがひてちままるものなり、毎年の曆をつくりて天地の事を知人は、歳差の數云ふて合點して居る事なり、佛教にては、世界の成じて、却のはじまる時は、人は壽八萬歳より、百年に一つ、減じて、人の壽十歳まで減ずるものなり、これを減却のあいださいふなり、その十歳より又百年に一つ、増て、八萬歳に増長するあいだを増却さいふなり、此一増一減に八十増減の事は、前篇

の成住壞空のごころにて詳しく書きたる事なり、今はその二十増減の第九へん目の滅却の時にて、次第くくに壽命の減て短命になる時なり、人の壽四萬歳より、佛の出世はじまりて、鳩留孫佛ご申せしなり、次に又三萬歳の時は、拘那含佛、二萬歳の時は迦葉佛にて、それよりはるかに間のへだりて、人壽百歳まで減じたる時に、釋迦如來世に出たまひしなり、其入滅より年の減し事を、勘篇ましましたるごころ、此御文の文明九年までは、佛滅の壬申より文明の丁酉にいたりて、二千四百二十六年になれば、百年に一つ、の消長にてかぞへたまひて、御老年六十三歳にせまりたりと示めしたまひたるものなり、此定命といふは大略にて、老少不定をならして見ればその數になる時代の事なり、佛在世は百歳の時なれども、佛は八十

歳にて入滅なり、もつこも佛壽を二十年減じたまひしは、慈悲恩を報すべき大因縁もある事なれば、上は大聖世尊より下は惡逆の提婆にいたるまで、のがれがたきは無常なりとあるへんにては、人なみの南浮人身の老少不定の平均なり、大阪の墓所にて火葬する死人の數を、年々七月の盆會にて人に知らしむるためにや、札にかきつけて出しおくをみるに、去年七月より今年七月まで十二ヶ月の間に、病人の多き年には合して、二萬人の餘もありし事あり、當年の如き病人なきごころには、弘化四年合して、一萬二千四百八十二人なり、然れば平均するにも、前後の年々をならして見るごころは、定めて今の世は、蓮師御入滅より三百五十年忌にもなりければ、定命減じて今のごころの定命は、五十一才ごもいふべし。ユレニヨリテ予ステニ

類・齡・六・十・三・歳・ニ・セ・マ・レ・リ・勘・篇・ス・レ・バ・年・ハ・ハ・ヤ・七・年・マ・デ・イ・キ・ノ・ビ・ヌ・コ
 は、類齡はかたぶくよはひこいふ事にて、御さしよられたる事なり
 この七年いきのびにつきて、佛出百歳の時より運算する定命と、佛
 滅より運算する定命と、多少のかぞへかた諸註の明かすところ僧衆
 はわきまへおくべし、又類齡の語は祖傳にも、類齡九旬にみちたま
 ふごあり、勘篇の語は勘辨さかきてかんがへわきまへる事也、今辨
 の字篇の字になりてあるは、文字の吟味にかゝはるごころにあらざ
 れば、語音さへ通ずればよき所ゆへに、この字をかきたまひたるも
 のなり、これも智昇の禮懺儀を引て勘編入の字なりともいひ、碧巖
 録を引て勘辨の字なりともいふ、いづれもつとめて考へたりといふ
 べし、我信曉は碧巖も禮懺も不吟味なれども、自身を勘辨してみれ

ば類齡七十四才に逼ければ、定命いつしか過去て二十二年までいき
 のびぬるぞ、誠にもつていかひ長命のいかめしき事なり、これにつ
 きても念死念佛にはあらざれども、この世にありての人よりも、父
 母兄弟諸眷屬妻子孫彦友同行、かの土に往しは十倍百倍の事なれば
 この世のまじはりいやまさる、かの土の方のなつかしく一蓮生をた
 のしむにも、佛恩をおもふほかなくして、念々相續常念佛常行大悲
 の御利益ぞうれしかりける。コレニツケテモ前業ノ所感ナレバイカ
 ナル病患ヲウケテカ死ノ縁ニノヅマントオボツカナシコは、流轉生
 死の境界、苦樂昇沈ごもにみな前業の所感にして、善人は善を行じ
 て樂より樂に入り、悪人は悪を行じて苦より苦に入ごは、大經の説
 相にて、因果報應は五惡段の如し、今は死の縁につるての前業所感

御 文 講 話

をのたまへるなり、**立井三藏**の師匠なりし**戒賢論師**に持病ありて、
 發たきは手足てあしにも火ひに焼やかるが如ごとく、刀かたなに刺さるが如ごとく、七十餘よ歳の
 時ときわけてきびしくおこる事ことありて、たへがたきがゆへに、此このからだ
 あるがゆへにいたみくるしむ事ことなれば、命いのちをつくして身しん躰たいをすてば
 やさ、心こころをさだめ食しょくを断たち、死しをまたれけるに、其夜そのよの夢ゆめに黄金色わうこんしき
 白銀色びやくこんしきと瑠璃色るりしきと、衣服いふくうるはしき三人さんの化現けげんありて、金色こんしきの天てん
 人にんその瑠璃色るりしきの天てん人にんをさしていはいはく、これは觀音菩薩くわんおんぼさつなり、又白銀またびやくこん
 色しきの天てん人にんをさしていはいはく、これは彌勒菩薩みらくぼさつなり、汝なんぢを教化けうけのため
 きたれり、汝なんぢは病苦びやくくをいごひて身みを捨すれご欲ほつすれごも、たごひ今生こんじやう
 のからだはつくすごも、その前業ぜんごふのつきざるあいだは、いくたび生しやう
 をかゆるごも、その苦痛くつうをまぬがる、事ことなし、然しかれば、その身みを捨す

御 文 講 話

てんより、いよく**正法**を弘通こうつうして、前生ぜんしやうの罪つみを懺悔ざんげせば、前業ぜんごふを
 消滅しょうめつすべし、われは文殊もんじゆなりとて、金色こんしきの天てん人にんはうせけり、戒賢論かいけんろん
 師しは夢ゆめさめて、病苦びやくくは前業ぜんごふの所感しょかんなる事ことをさごりて、いよく**瑜伽**
 唯識ゆゐしきの法門はふもんを弘興こうきやうして、立井三藏りつせいさんざうにも相傳さうでんのありし事こと、慈恩傳じゐんでんに見
 へたり、死しの縁えんにのぞむも前業ぜんごふの所感しょかん、あはれ死しなばやさおもひて
 も死しなれざるも、又前業またぜんごふの所感しょかんなり、おもふに因果いんぐわを知るべし。無む
 漏ろうの佛體ぶつたいは、有漏うろうの凡體ぼんたいにひきかへて無漏むろうの依果いぐわ不思議ふしぎなる佛身ぶつしん
 のここなり。大經だいきやうには、自然じぜん虚無こむの身しん無極むごくの體たいありて、和讚わさんにて
 は、顔容げんよう端正たんじやうたくひなし、精微しやうみ妙軀めうく非人天ひにんてん、虚無こむ之身しん無極むごく體たいある
 これなり、漏ろうは煩惱ぼんなんの事ことにて、煩惱ぼんなんなきからだといふ事ことなり。シカ
 レバ一念歸命いんぱんきいめいノ他力安心たうりきあんしんヲ佛智ぶつちヨリ獲得かくとくセシメン身みノウヘニサヒテ

ハ畢命已期マデ佛恩報盡ノタメニ稱名ヲツトメンニイタリテハアナ
 ガナニナニ不足アリテカ先生ヨリサダマレトコロノ死期ナイソ
 ガンモカヘリテナロカニマドヒヌルカトモオモヒハンベルナリとは
 儀式作法の自力歸命の信心にはあらず、他力よりさづけらるゝごこ
 ろの他力信心なるを、佛智より獲得の信心と示めしたまへるなり、
 畢命已後とは、いのちあらんかぎりといふ事なり、電光朝露は、い
 なづまのひかり朝つゆの如くなる身なりとなり、其ほかあささきの
 御示めしは、文相のまゝをよみていたゞくべし。イソギ今日ヨリこ
 はいまも無常の風きたらんことをば知らぬ牀にて、すぎゆく心中を
 ひきたてゝ、いそぎ今日よりこのたまへるなり、いそげく佛法の
 道といふ事也。一向ニ無量壽佛ニ歸命シテとは、この一章の發端は

人間壽命をかぞへるよりはじまれる文章ゆへに、かぞへつくさぬ無
 量壽を、たのしみねがへこむすびたまひたるなり、これが一章の文
 法といふものなり。文明九年九月十七日俄思出之間辰尅己前早々書
 記之訖とは、晨朝の時の御筆俄の子細は何ゆへなりしも知らず、筆
 にまかするの詠歌も、ふでにまかするこのみありて、意内ははかり
 て知り難し、かきおくこあれば、滅後末世の遺弟へ御かたみとはあ
 きらかに知られて、わけて有難かりける御教示なりけり。

第三通 當時世上之章

夫當時世上ノ體タラクイツノコロニカ落居スベキトモオボエハンベ
 ラザル風情ナリとは、應仁の亂世にて、東國西國ともに、合戦の衢
 となりし時なり、細川山名畠山等の所爲にて、京地は軍勢のあつま

御文講話

りて、弓矢さけびのおこかまびすしく、關東には足利上杉のたゝかひやむことなく、文正元年丙戌に年號あらたまりて、二年もたゝずその次丁亥としより應仁元年とあらたまる、これも三年たゝざるに己丑より、文明元年とあらたまる、そのうちには兵火のために、清水寺も雲居寺も炎上、御靈西陣の騷動、内侍所も鳴動やら、多田の廟の鳴動やら、壹町あまりの慧星が出やら、二三寸の紅雪が降やらその時代の此御文なるがゆへに、當時世上の體たらく、いつのころにか落居すべきと示めさせられたるものなり。シカルアヒダ諸國往來ノ通路ニイタルマデモタヤスカラザル時分ナレバ佛法世法ニツケテモ千萬迷惑ノオリフシナリとは、その時代の軍書にてみるべし、應仁記といふものも二十卷ありて、みな實録なり、如何にも國々に

御文講話

新關をかまへて、往來のものをも敵か味方か吟味して、用心きびしき折からなれば、西國順禮も善光寺参りもなきはづなり。コレニツケテモ人間ハ老少不定トキトキハイソギイカナル功德善根ヲモ修シイカナル菩提涅槃ヲモ子ガフベキコトナリとは、いかなる功德といへば、觀經に出たる三福の九品の諸善にて、孝養父母奉事師長、慈心不攝修十善業、受持三歸具足衆戒、不犯威儀發菩提心、深信因果讀誦大乘、勸進行者修行六念等の善根の事にて、すなはち善因たるものなり、いかなる菩提涅槃とは、煩惱を轉じ、生死を轉ずる佛果の事にて、即心成佛即身是佛をさくらんとする事なり、佛參社參の通路を絶したるにつけても、何になりともこりつきて、後生の覺悟はすておかれぬとすゝめたまへるなり、その覺悟について次の御

御 文 講 話

示めしのはしをおこしたまへるおもむきを有難くいたゞくべし。シ
 カルニイマノ世モ末法濁亂トハイヒナガラコ、ニ阿彌陀如來ノ他力
 本願ハイマノ時節ハイヨクノ不思議ニサカリナリとは、正法像法
 の二時は、いつしかおはりて、當今末法のありさまは、濁にこり
 亂ごみだれて、持戒なければ破戒もなく、比丘比丘尼を奴婢として
 法師僧徒のたふささも、僕従もの、名ごしては、力者法師に與か、
 せいやしきものささだむるも、末法のすがたにて、外儀は佛教のす
 がたにて、内心外道の僧もあり、如來の法衣をつねにきて、鬼神を
 あがむるものもあり、蛇蝎奸詐のこゝろにて、背正歸邪まさるゆへ
 鬪諍堅固の時代にて、白法隱滯するがゆへに、釋迦の遺教かくれし
 む、これなん末法の濁亂といふものなり、五濁惡邪はまされども、

御 文 講 話

彌陀の悲願ひろまりて、念佛往生さかりなるを、今の御示めに末
 法濁亂といひながら、阿彌陀如來の他力本願は、いまの時節はい
 よくさかんなりと、おほせられたるものなり。サレバコノ廣大ノ
 悲願ニスガリテ在家止住ノトモガラニチヒテハ一念ノ信心ヲトリテ
 法性常樂ノ淨刹ニ往生セズバマコトニモテタカラノ山ニイリテ手ヲ
 ムナシクシテカヘランニニタルモノカヨク、コ、ロチシヅメテコ
 レチ案ズベシとは、彌陀の悲願ひろまりて、念佛往生さかりなるが
 ゆへに、その悲願にすがりて、たすけまじませご一念歸命の信心を
 こりて、念佛往生を遂げよこのすゝめしめなり、寶の山のたごへは
 上にも出たる事にて、信心をこるは名號をこる事なり、無上寶珠の
 名號も、眞實信心ひこつなるをこりうるは、すなはち本願や名號に

て、また名號や行者なれば、南無阿彌陀佛の主になりたる爲得大利の身なるをあやまちて、六道の貧人となりはつるならば、寶の山に入て手をむなしくしてかへるにおなじこの誠め也、法性常樂は、すなはち穢身すてはて、法性常樂しやうぜしむとある、即證眞如法性の常住の極樂のここなりと知るべし、善導大師の立義分に、此穢身を捨て、即彼法性の常樂を證とある釋意にて、御開山の御本書證の卷に、利他圓滿の妙位、無上涅槃の極果として、正定聚に住するがゆへに、必滅度にいたる、滅度は常樂なり、常樂は寂滅なり、寂滅は涅槃なり、涅槃は法身なり、法身は實相なり、實相は法性なり、法性は眞如なり、眞如はすなはち一如なりとあるところの、無上大涅槃なる法性常樂の淨刹にて、報應化種々の身を示現する、一如法

界のみやこのことなりと頂戴すべし。シカルニ諸佛ノ本願ヲクハシクダヅヌルニ五障ノ女人五逆ノ惡人ヲバスクヒタマフコトカナハズトキユエタリとは、上の一帖目にも二帖目にも、詳しく示めしたまひたるおもむきにて、諸佛にも衆生無邊誓願度の本願ありけれども惡人女人の成佛を誓たまひし別願のなければ、超世の悲願さはいはざるなり。コレニツケテモ阿彌陀如來コソヒトリ無上殊勝ノ願ヲチユシテ惡逆ノ凡夫五障ノ女質ヲバワレタスクベキトイフ大願ヲバオコシタマヒケリアリガタシトイフモナチオロカナリとは、ワレタスクベシの我の一言は、四十八願のひみつゝに、我佛を得ばくこ設我の我の字、四十八ありて、其上に又三誓ありて、我超世の願を建、我大施主となる、我名聲を聞きむとみづから超世とも超十方と

もなのりたまへるを、今の御示めしの我たすくべきといふ大願をおこしたまふごある御ころにて、すなはち大經の超發無上殊勝之願正信偈の建立上願超發弘誓これなり。コレニヨリテムカシ釋尊靈鷲山ニマシテ一乘法華ノ妙典ヲトカレシトキ提婆阿闍世ノ逆害ヲオヨシ釋迦韋提ヲシテ安養ヲ子ガハシメタマヒシニヨリテカタシケナクモ靈山法華ノ會座ヲ没シテ王宮ニ降臨シテ韋提希夫人ノタメニ淨土ノ教ヲヒロメマシクシニヨリテ彌陀ノ本願ヲキニアタリテサカンナリコノユヘニ法華ト念佛ト同時ノ教トイヘルコトハコノイハレナリこは、上にある惡逆の凡夫を、提婆阿闍世にあて、五障の女質をば、韋提希夫人に配當して、觀經の説相を引つらね、且又今章の發端に、應仁文明の頃の亂世にて、靈佛靈社への祈願も絶し

いかなる功德善根をも修し難けれども、他力易行の法門は、無願無行の身たりながら、佛果菩提にいたるがゆへに、いよく不可思議にさかんなりごある、此一章なるがゆへに、彌陀の悲願は逆惡を攝するがゆへ、觀經の逆罪を縁こして、安養の往生を願にいたり、淨土の機縁熟したれば、御本書教の卷の總序にも、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり、然れば淨邦縁熟して、調達闍世をして逆害を興せしめ、淨業機彰れて釋迦韋提をして、安養を選しめたまへりご示めしたまへる御ころにて、祖師聖人の御在世にも、南都北嶺の憤ほりにくみして、法に背き義に違し、空師鸞師は、流刑の御難、住蓮安樂は死罪の仕置、この逆縁より淨土の法門滿天下にひろまり、存覺上人破邪顯正鈔の時

代には、山寺聖道の諸僧、山臥巫女陰陽師等が、無實の讒言濫妨にて、専修念佛は佛法にあらず、外道法なりとし、念佛は出離の行にあらずとし、念佛は不吉の法とし、一向の行者を邪法なりとする等の十七條の件々によりて、御門下の面々在所を追放せられたるごき存覺上人顯正鈔をかきて言上したまひ、御成敗をかうふりて追放せられし門葉を、在所のの本宅にかへらしめたまはれし、治國撫民の恩憐裁許をこひねがひたまへるの時代は、元享年中の頃にて、すなはち佛光寺の了源上人は、伊賀の山中にて切ころされ、血文をかきて悪黨を化益ありしも、開山の御一流を滅亡せしめんごはかる、同じ元享甲子の頃なりしもひるがへりての御繁昌、蓮如上人の御難には、悪徒のために大谷の破滅さず、御養生の事ごもは人みなうけ

たまはり傳へたる、あらしくしき事なりしが、その逆縁より北國のはてのはてまで、御化導のゆきごききたまへること、觀經の逆事より淨土の機縁熟したるのすがたにひごしかるがゆへに、今も此亂國の中ながら、一日の御化益もおこたりなく、不可思議にさかんなるをあはせておもふべき事なり、これが觀經を御引用の御ころならんか、御文面はよみて知るべし、たゞし法華念佛同時の辨別は、寸珍につくすべき沙汰にあらず、覺如上人の出世元意ごある聖教に、法華念佛同體異名ごして、淨土眞宗をば法華同味の教ご判じたまへるより、存覺上人の法華問答に、法華方便品の如我昔所願の文、無量義經の未見眞實の説等、つぶさに判釋ありて、彌陀を信じて、法華をそしり、法華を信じて彌陀をそしらんは、ながれをくみてみな

かみを濁すが如し、この教誡、又同じく決智鈔には、法華の益も凡夫のためには西方の往生に歸すること、その義明かなりとありて、法華ご念佛ごもごより一法の異名なりと示めしたまへること、よく、拜見して、孝經をさへげておやのかしらをうつが如しと誡しめたまへるのことも有難く識得すべし。コレスナハテ末代ノ五逆女人ニ安養ノ往生ヲ子ガハシメンガタメノ方便ニ釋迦韋提調達闍世ノ五逆ヲツクリテカ、ル機ナレドモ不思議ノ本願ニ歸スレバカナラズ安養ノ往生ヲトグルモノナリトシラセタマヘリとは、大聖おのくもろごもに、凡愚底下のつみびごを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけりのこゝろにして、阿闍世太子は善思義菩薩、提婆達多是寶伽羅菩薩いづれも權化にあらざるはなし、三帖和讃歡喜鈔の觀經

讚のごころを照し合せて、その典據の審かなる事を知るべし、賓伽羅の事は決智鈔に出たり。

第四通 三首詠歌之章

夫秋モサリ春モサリテ年月ヲオクルコト昨日モスギ今日モスグイツノマニカハ年老ノツモルラントモオボエズシラザリキとは、下にあら秋さり春さりの御文は、初夏仲旬の事ゆへ、秋より春夏ごうつりて、年齢つもり八十四歳になるこの次第は順なり、今の御文は十二月二日ごもあり、暮冬仲旬ごもありて、いづれ極月の事なり。然れば春さり秋さりご次第のあるべきに、秋もさり春もさりごは、あごもごりに聞ゆるなり、なにゆへならんも知らざれごも、下の章は年齢つもりて八十四ごかぞへるのみなれば、秋春夏ご順次にかぞへた

御 文 講 話

まへるなれども、今章はおなじ年老のつもるにも、いつのまにかは
 おぼへず知らずに、うかくこつもるをのたまへるゆへ、まづ近こ
 ろすぎし秋もさりよりあごへもごりて、春もさりし去年もさりし去
 々年もさりしと、往事を思へば月花の風流にもまじはり、苦樂の悲
 喜にもあひたりと、夢の如く幻の如きをおもひめぐらしたまへるの
 意味もましますならんか。シカルニソノウチニハサリトモアルヒハ
 花鳥風月ノアソビニモマシハリツランマタ歡樂苦痛ノ悲喜ニモアヒ
 ハンベリツランナレドモイマニソレトモオモヒイダスコト、テハヒ
 トツモナシタ、イタヅラニアカシイタヅラニクラシテ老ノシラガト
 ナリハテヌル身ノアリサマコソカナシケレゴは、花鳥は春の遊興、
 風月は秋の雅蕙なり、樂に喜び苦に悲きは、歡樂苦痛の悲器なり、

御 文 講 話

然れどもその泣くも笑ふも、その時その座のあごかたなく、徒らに
 夜を明し徒らに日を暮して、目は霞、耳に蟬なき、葉は落て霜をい
 たゞく老の暮かな、こいふ風情なるを、老の白髪となりはてぬる身
 のありさまこそかなしけれと、祖傳の平太郎社參の段に、故郷にか
 へりて往事をおもふに、年々歳々夢の如し幻の如しとあるにおなじ
 サレドモ今日マデハ無常ノハグシキ風ニモサソハレズシテ我身アリ
 ガホノ體ヲツラ／＼案ズルニタユメノゴトシマボロシノゴトシ
 は、無常の暴風は、神仙をも論ぜざるおもむきは、一帖目の電光朝
 露の章と合してみるべし、芭蕉泡沫の身、破れやすく消へやすく、夕
 電朝露の命たちもちがたくたのみがたし、これなんはげしき無常のす
 がたなりけり、ひかる源氏の物がたりのなかにも、幻の巻きてむら

四帖目
五百七十

さき式部のふでのあごぞあはれなりける。イマニテハ生死出離ノ一道ナラデハ子ガフベキカタトテハヒトツモナクマタフタツモナシ。老の白髪となりはてぬる、イマニテハ後生をねがふ道よりほかに、二ツも三ツも道はなしと示めしたまへるなり、この白髪の説につきて、記事珠の中に、阿含經を引て、大天王の白髪の縁を出せり、大王つねに髪をすきあげるものに、我髪の中に白髪を生じなばしらせよといへりしに、白髪の一すじ生じたるさき、そのよしを告ぐるに、大王手をひらきてその白髪をぬきて、此手のひらにのせよとありければ、髪をあぐる人その白髪をぬきて、大王の手上にのせたてまつれば、大王手のうへに白髪をのせながら偈を説て曰、我頭白髪を生ず壽命轉衰減せり、天使已來り、我今に至て道

を學の時、こなへて、國も位も太子にゆづり、剃髪して袈裟を着し、至心に梵行を修せられしとあり、これも引たるは記事珠者博覽の功といふべし、命ありてこそ名聞利養もねがふなりけれども、後生一途となるさきは、名聞の一ツもいらす、利養の二ツもいらざるなり、吉崎建立の章に、名聞利養を本とせず、たゞ後生菩提をこそするがゆへなり、見聞の諸人偏執をなす事なかれとあるにひこしく、今もあひかまへて偏執をなす事なかれとある、おもむきおもひあわせて、本願の一法を信ずるの一途なるむねを知るべし。コレニヨリテユ、ニ未來惡世ノワレラゴトキノ衆生ヲタヤスクタスケタマフ阿彌陀如來ノ本願ノマシマストキケバマユトニタノモシクアリガタクモ思ヒハンベルナリとは、これは有難き安心のこゝろへなり

御 文 講 話

たやすくたすけたまふは、所歸の佛願まここにたのもしく有難くおもふは能歸の信受なり、この領解の安心を、彌陀をたのむ一念も本願たのむ決定ともいふなり。コノ本願ヲタ、一念無疑ニ至心歸命シタテマツレバワヅラヒモナクソノトキ臨終セバ往生治定スベシこは、一念無疑は、眞宗念佛キ、エタル一念無疑なるものなり、至心歸命は至徳の尊號たる六字の佛心、行者の心中に満入したる歸命の信なり、わづらひもなくこのたまへるは、わづらはしき事なく、まぎらはしき事なき、利他廻向の信樂にて、願に相應し教にしたがひ佛語にしたがひ、外の雜縁さらになきすがたなりけるにぞ。そのこき臨終せば、往生治定すべしとあるは、執持鈔の意味にてのしめしならん、しからざれば臨終せば、往生治定すべしの言句通じ難し、

御 文 講 話

往生治定は平生のこばなり、臨終には往生をこぐべしとあるべきことなり。しかるに治定すべしとあるは、執持抄に、平生のこき善知識のこばのしたに歸命の一念を發得せば、そのこきをもて娑婆のをわり、臨終ごおもふべしとある、臨終の意味ならん。然れば往生治定のこば、義理にかなへり。眞要鈔に、平生をいはず臨終をいはず、たゞ信心をうるこき、往生すなはち定まるの義をしめし給へるにおなじ、一帖目の第四通に、往生治定ごおもひさだむるくらゐとあるが、執持鈔の臨終ごおもふべしとのくらゐなり、これらの意味をよろこぶが御文をいたゞくこいふべき事なり。モシソノイノチノピナバ一期ノアヒダハ佛恩報謝ノタメニ念佛シテ畢命ヲ期トスベシとは、二帖目の第三通に、一念をもてば、往生治定の時刻さだ

御 文 講 話

め、そのごきの命のぶれば自然ご多念におよぶご示めしたまへるに
 おなじ、これすなはち乃至一念の義なり、唯一念ごばかりのごきは
 時刻の極促ごあり、乃至一念のごきには、時節の延促ごあり、今は
 その延促の義趣なり。コレスナハチ平生業成ノコ、ロナルベシトダ
 シカニ聽聞セシムルアヒダソノ決定ノ信心ノトホリイマニ耳ノソコ
 ニ退轉セシムルコトナシトアリガタシトイフモナチチロカナルモノ
 ナリごは、眞宗法要の第十一、淨土眞要鈔の末七十四紙の左二行目
 元享四歲甲子正月六日コレナカクトあるごころに、本主了源ごある
 佛光寺先徳の所持なりごある、當流の先達のかきのへられたる、
 淨土文類集の中にありし平生業成の義、不來迎のおもむきをつたへ
 たまひて、眞要抄相承の名目をたしかに聽聞せしめたまひたるの御

御 文 講 話

宗義なり、耳のそこに退轉せぬごあるは、上の章にては、「ナラフト
 コロナリ」ごあるにひごしき語勢ご云べし、本願の十念は、その體
 は報謝たる物にはあらず、しかるを今家におゐて、口稱するごころ
 の聲ごを、佛恩報謝の念佛ごしたまへる事は、ナラヒつたへたま
 へる面授口訣の相承なるものなり、これをすなはち信の上の稱名ご
 も傳へたまへる事、上に縷々書きたるが如し。サレバ阿彌陀如來他
 力本願ノダフトサアリガタサノアマリカクノゴトククナニウカブニ
 マカセテコノコ、ロナ詠歌ニイハク
 ヒトタビモ ホトケヲモノム コ、ロコソ マコトノノリニ
 カナフミナナレ
 ツミフカク 如來ヲタノム 身ニナレバ ノリノチカラニ

西へコソユケ

法ヲキク ミナニコ、ロノ サダマレバ 南無阿彌陀佛ト

トナヘコソスレ

御 文 講 話

我身ナガラモ本願ノ一法ノ殊勝ナルアマリカクマウシハンベリヌゴ
は、次下に三首の次第をのべさせられてハジメハ一念歸命ノ信心決
定ノスガタヲヨミハンベリゴありて、歸命の信心は、佛智他力より
たまはりて、無疑の一念をひきたび獲得して、ふた、びうつらずか
はらざる憶念相續の大信心也、この意味よく、思熟すべし。蓮如上
人御一代聞書本の四十八丁の左三行目ニ、十念ノ信心チエテノチノ
相續トイフハサラニ別ノコトニアラズ、ハジメ發起スルトコロノ安
心チ相續セラレテ、ダフトクナル一念ノコ、ロントホルチ憶念ノ心

御 文 講 話

ツ子ニトモ、佛恩報謝トモイフナリ、イヨ、歸命ノ一念發起スル
コト肝要ナリトオホセ候ナリ、ゴあるを、幾度も、讀みて深く心
中に領納すべし、はじめ發起の信心相續して、別の物がらなきを一
念のこほりたる憶念の心つねなるときは、當信心也、ひきたびは
れたる疑ひのふた、びくもらぬ信相なり、その信心をタノムこゝろ
とするときは、常たのみなり、常決定なり、このこゝろを、この一
念歸命ゴある一首に詠じたまへるとき、「ヒトタビモの五文字をおか
せられたるものなり。記事珠は、これを辨釋して、コノ御歌ヲ據ト
シテ幾度モタノム證トスルハ非ナリ、今ノモノ假名ハヤスメ詞ニ同
ク、意輕キテニハナリ、誰チカモシル人ニセシ高砂ノト讀ルモノ假
名ト同シ、又カタシケナクモト云モノテニハニ同シ、空公及雲窓ソ

御文講話

ノ説一軌也、ごあれども今寸珍にいふごころはしからず、マコトノ
 ノリニカナフミナなる信心は、他流の心存助給の願心だのみにはあ
 らざるなり、記事珠はたのむといふを度我救我の義ごのみおもへる
 ならん、先年三業たのみ流行のせつには、新義者流におひつめられ
 ては、たすけたまへを請求の義にして、古義の正意なりとて、講釋
 せし學者もありければ、諸國に末代無智の御文の筆記もあるらんご
 おかしくも、うたてくもありける、彌陀をたのむが祈願請求の事な
 らば、いかにもく、記事珠のおもふが如く、常願ひに願ひつゞけて
 いくたびも願ひてばかり居る安心にて、よろこびおちつくの領解は
 なく、こほるまはなき水車の風情なるべし、記事珠ごは後の時代の
 事なれども、たすけたまへごたのむごは、無疑一念の事なりごは解

御文講話

し得ざりしものゆへ請求の義なりご辨せしは、かしら坊主ごいはれ
 ても、寸珍より評すれば味噌すり坊主のすり古義ごもいふべし、な
 んぞ御文の文面の如く、たすけたまへごふかくこゝろにうたがひな
 く信じてご、信の事なりごは、圓解をひらかざりしごや、たすけま
 しませごおもふ心の一念の信ごも、信力によりてさだまるごもある
 を、たすけたまへごおもふ心ひごつにて、やすくほごけにはなりけ
 るごご、自信教人信の辨別にはおよばず、あまたの所化にたすけた
 まへば、救我度我請求の義ごしたる聞書させて世にのこさしめたる
 は、祖門の罪人ごいふべし、そのころの同行會合には、愚夫も愚婦
 も出體釋名體同義別をき、おぼへて、講釋ごごばのはやりたるもお
 かしかりし。今いはくヒトタビモフタ、ビモイクタビモ他力より授